

# 名古屋医科大学の学生と教員の意識

——名古屋医科大学鶴天学友会学生会編集・発行『名大』の検討を通して——

吉川卓治・阿部貴哉・藤井利紀・柘植宗樹・林 喜子

はじめに

一 学生による『名大』への期待とその変化

(一) 『名大』が果たすべき役割

(二) 『名大』を通じた情報交流

(三) まとめ

二 学生からみた『名大』と『鶴天学友会報』との統合問題

(一) 「新聞」に拡充するための方法としての統合

(二) 大学の「新聞」に拡充するための統合

(三) 統合の実現と統合後の懸念

(四) まとめ

三 名古屋医科大学における「選手制度」論争

(一) 運動部組織の概要

(二) 論争前期―「選手制度」をめぐる対立

(三) 論争後期―「選手制度」概念の変容

(四) まとめ

四 『名大』にみる杉田直樹の医育観

(一) 杉田直樹と『名大』

(二) 「徳」のある医師の養成

(三) まとめ

結びにかえて

## はじめに

名古屋医科大学は、明治四（一八七二）年八月に開設された名古屋県の仮病院・仮医学校を起源とし、愛知（県立）医学校、愛知県立医学専門学校などを経て、一九二〇（大正九）年に設置された県立の愛知医科大学が一九三一（昭和六）年四月三十日をもって廃止され、翌五月一日に官立医科大学として改めて設置されたものである。<sup>1</sup>一九三九年四月に名古屋帝国大学医学部へと改組されるから、一九三〇年代はほぼ名古屋医科大学の時代だったとみることができ。

名古屋医科大学が設置される際、教授人事をめぐって大きな紛争が発生した。愛知医科大学の全二一名の教授は、名古屋医科大学の教授として再任されるとの了解のうえで、いったん辞表を提出したのだが、そのうち九名には教授辞令が交付されなかった（内一名は助教教授に降格して発令）。二一名の教授のなかには、愛知医学校出身で、愛知県立医学専門学校以来、教員を務めてきた者が三名含まれていたのだが、その全員に対して教授辞令が発令されなかった。<sup>2</sup>このため、東京帝国大学出身の藤井静英学長の専断による「学閥人事」だとの非難が沸き起こった。助手たちは学長を糾弾してストライキを決行した。学生たちも連日のように学生大会を開催して同盟休校に突入した。混乱のなか、ついに藤井学長は辞意を表明し、十二月一日に辞表を提出して大学を去った。後任には紛争の鎮静化に尽力した田村春吉が就任した。

注目されるのは、紛争の過程で助手や学生たちによる「自治」を要求する運動が展開され、組織化されていったことである。助手層は、学長に対抗するために「助手団」なる組織を結成した。これはやがて農村医療運動へと展

開していった<sup>③</sup>。学生たちは、学友会内部に独自の「学生部会」を発足させることを認めさせた。医学史家の神谷昭典は、こうした学生たちの動きのなかに、「滔々たるファシズムの流れに抗して学問の自由を守り、時代の良心としての学灯を守り育てるという姿勢」を見出すことができるかと極めて高く評価している<sup>④</sup>。そのうえで、神谷は、「自治学生部会は、運動部、選手制度の改革にとりくんだり、基礎医学棟の二画に青木文次らの肝煎りで「共済部」（学生消費組合）（水野宏の記憶によれば、当時共済団の理事長だった外科の齊藤「真」教授が見かねて、職員を派遣してくれたという）を開設したり、学生の生活・文化の改善のためにさまざまな努力をした。学生部会の機関紙「名大」の創刊（八年一月一八日付）もそのひとつである」と、「名大」を学生部会の「自治」活動に位置づけて紹介している<sup>⑤</sup>。

本稿は、このような名古屋医科大学および前身校の教職員と卒業生、および学生を構成員とする同窓会組織の鶴天学友会のなかに学生の「自治」組織として置かれた学生部会が一九三三年一月から一九三五年四月までの二年三か月にわたって編集・発行した機関誌『名大』を用いて、名古屋医科大学の学生や教員の意識についていくつかの側面から検討しようとするものである。

近年、戦前中等諸学校の生徒、教員、卒業生によって構成される校友会ないし学友会の編集による『校友会雑誌』を利用した、「学校文化」に関する研究が齊藤利彦編『学校文化の史的探究—中等諸学校の『校友会雑誌』を手がかりとして—』（東京大学出版会、二〇一五年）によって試みられている。同書は、中学校や高等女学校、実業学校の『校友会雑誌』を多く収集し、学校文化の表象や、そのなかに見出される相克の様相、校風との関連にアプローチしている。同書が中等諸学校の『校友会雑誌』を検討対象としたのに対して、本稿が資料として使用するのは、高等教育機関の、しかも学生が独自に編集・発行した機関誌であるという点に特徴がある。

ここで名古屋医科大学の学生部会と『名大』の概要を示しておこう。すでに触れたように『名大』の編集・刊行

主体は鶴天学友会の学生部会だった。愛知医科大学が廃止され、名古屋医科大学が設置された際、従来からの学友会組織をどう継承するかが問題となった。学友会の会報『鶴天学友会会報』<sup>(6)</sup>によれば、一九三二年六月から十月にかけて開催された学友会理事会でそのことが繰り返し議論された。その結果、十月十一日に「法文上は名古屋医科大学は新設なれども内容其他凡ての点より愛知医科大学の連続と認むべきもの」なので学友会も「当然存続すべきものなり」という点で合意がなされ、改めて「名古屋医科大学鶴天学友会規則」が制定された。<sup>(7)</sup>このとき認められた重要な変更点の一つとして「学生部会を新設し該部は自治を以て凡てを処理し学友会は直接干渉せざることゝなす」<sup>(8)</sup>ことがあげられている。

「名古屋医科大学鶴天学友会規則」<sup>(9)</sup>によれば、鶴天学友会の目的は「会員相互ノ親善、心身ノ修練、学風ノ顕揚ヲ図リ併セテ学友ノ共榮ヲ期スル」こととされ、会員は、「学生会員」(名古屋医科大学学生と愛知医科大学予科生徒)、「学外会員」(名古屋医科大学と前身校の卒業生と元学内会員)、「学内会員」(名古屋医科大学・愛知医科大学職員)、「名誉会員」からなっていた。学生会員は、学生部会と予科部会を組織するとされていた。学生会員に愛知医科大学予科生徒が含まれているのは、在校生の卒業する二年後まで予科が存続することになっていたからである。鶴天学友会の会長には名古屋医科大学長が「推薦」されるとされ、また会員を代表して評議員会に出席して会務を審議するために評議員が置かれることになった。評議員は、学内会員から二〇名、名古屋支部から二〇名、他の地方支部から各一名(会員三〇名以上の支部は二名)、そして学生部会から四名、予科部会から一名それぞれ推薦し、いずれも会長が委嘱するとされた。事実上、運営には教職員からなる学内委員が大きな役割を果たすことになったとみられるが、学生・生徒も評議員に加えられており、しかも草案の段階で学生部会からは一名とされていたのだが、それが学生代表も参加してなされた協議のなかで四名に増員され、位置づけが強化されたことが注目される。<sup>(10)</sup>

学生部会の活動を支えた財政基盤について『鶴天学友会報』に掲載された予算書を使ってみておこう。一九三四年度の収入について予算ベースで、前年度繰越金が三五二円（二円未満四捨五入）、会費（年会費一九二〇円、入会金二二〇円）二〇四〇円、補助金（学友会補助金）四五〇円、雑収入六円、合計で二八四八円だった。一方、支出は、同じく庶務会計部費七六七円、共済部費一二六円、会報部費四〇一元、学芸部費二九八円、運動部費六三二円、予備費六一二円、合計二八四八円となっていた<sup>15</sup>。

予算書からは『名大』の印刷経費や発行部数などもうかがうことができる。すなわち、発行費は年間三八七円で、うち印刷費と紙代が一〇回分で三一五円、印刷のための銅版代が一〇回分で二五円、その他などとなっていた。発行部数は一回七〇〇部となっていた<sup>16</sup>。名古屋医科大学の学生定員は一年生八〇名で、修業年限は四年だったから学生数は全体で三二〇名前後だった。残りの三八〇部は、第一章で触れるように、教職員や同窓生のほか附属医院の「看護婦」組織や他大学にも配布されていたようである。ただし、OPACで検索したところ、現在のところ他大学や国会図書館には所蔵されておらず、名古屋大学附属図書館医学部分館のみに所蔵されている。誌面は、タブロイド版七段組み（第一〜一九号）ないし八段組み（第二〇〜二三号）で、毎号八〜一〇ページからなり、ほぼ毎月刊行されたが、一九三五年四月の第二二三号をもって終刊となり、鶴天学友会の『鶴天学友会報』に合併されて、一九三五年十月より『名大友会報』となった。

以上をふまえて、第一章では、学生が『名大』にどのような役割を期待し、刊行を重ねることでそこにどのような変化が生じたのかを説明する。第二章では、『名大』と『鶴天学友会会報』との統合を学生がどうみていたのかわらかにする。第三章では、名古屋医科大学の学生スポーツにおける「選手制度」の内容とその帰趨を検討する。そして第四章では、名古屋医科大学開設時に精神医学の担当教授として赴任し、『名大』に多くの記事を寄せた杉

田直樹の医育観を考察する。

注

- (1) 名古屋医科大学の設置とそれにともなつて発生した紛争の経緯については、名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一、一九九五年、二一〇～二一五ページを参照。
- (2) 愛知医科大学の助教授は、一八九九年勅令第四五六号の「奏任文官又ハ判任文官ト同一ノ待遇ヲ受クル公立学校職員ヲ教官其ノ他教育事務ニ従事スル文官ニ任用〔中略〕スル場合ハ転任ト看做シ其ノ手續ハ転任ノ例ニ依ル」との規定により、そのまま名古屋医科大学の助教授に横滑りした。ただし、このとき小宮喬介（東京帝国大学出身）と長松英一（愛知県立医学専門学校出身）の二人は教授に昇任している。
- (3) 神谷昭典『日本近代医学の相剋―総力戦体制下の医学と医療―』医療図書出版社、一九九二年、一三二ページ。
- (4) 同前、一三三ページ。
- (5) 同前、一三三～一三四ページ。
- (6) 『鶴天学友会会報』は、もともと一九〇〇年十二月に愛知医学学校同窓会が発刊した『同窓会雑誌』に端を発する。同誌は、一九〇九年に愛知県立医学専門学校校友会による『校友会雑誌』となり、愛知医科大学設立後の一九二〇年十二月に『鶴天学友会会報』となった。この『鶴天学友会会報』は、一九三三年三月に『同窓会雑誌』から数えて通号七三号に達したが、愛知医科大学鶴天学友会が名古屋医科大学鶴天学友会へと改組されたことにもなつて『鶴天学友会報』と名称変更し、改めて一号から号数を付している。繁雑なので、本稿では鶴天学友会による会報は『鶴天学友会報』という名称で統一している。なお概要は、吉川卓治「史料としての同窓会会報（一）―名古屋大学の前身校を事例として①―」（近代日本教育史料研究会『かわら版』第八〇号、一九九三年四月）でも説明している。
- (7) 『庶務部報告』『鶴天学友会会報』第七三号、一九三三年三月、六二ページ。

(8) 同前。

(9) 以下、「名古屋医科大学鶴天学友会規則」については、同前、七五〜七八ページ。

(10) 草案は、同前、七一〜七四ページ。

(11) 「会計部の知らせ」『鶴天学友会報』第一〇号、一九三五年一月、一一ページ。

(12) 同前。

(13) 青井東平編『名古屋大学医学部九十年史』（名古屋大学医学部学友会第五二回学友大会、一九六一年）は、「名大」は号を重ねること二十有五（昭和十年）に達した」としている（二三九ページ）。神谷も、『名大』が「学友会の新聞部として独自の編集部員と財政を持ち、昭和一〇年刀折れ矢尽きて学友会報に合併されるまで二五号を発行した」と述べている（神谷前掲書、一三四ページ）。しかし、二四号および二五号の存在は今のところ確認できておらず、差し当たり、本稿では二三号をもって終刊となつたとしておきたい。

## 一 学生による『名大』への期待とその変化

名古屋医科大学の学生会によつて創刊された『名大』には、何らかの果たすべき役割が学生から期待されていたと考えられる。また、その期待は創刊時から不変なものではなく、二年三か月にわたつて編集・発行が続けられる中で徐々に変化していったと思われる。そこで本章では、『名大』に期待された役割がどのように変化し、それを背景として『名大』自体がどのように変わったのかを検討する。

(一) 『名大』が果たすべき役割

はじめに、『名大』がどのような意図をもって創刊されたのかを見ておきたい。第一号の巻頭記事には、以下のような創刊の意図が述べられている。

こゝに学生会会報の創刊を見るに至つた事は、吾等学生にとつて喜ぶべき一つの発展階梯である。(中略)そもそも言論報導の発達なくして文化生活の向上を期し得られぬ事を考へ合するなら、吾等はこの会報の公正円満なる発展活動によつて一層学生生活を有意義たらしめたいと思惟するものである。<sup>〔1〕</sup>

引用文から読み取れるように、この学生会会報が目指す学生生活の向上に必要な不可欠のこととして「言論報導の発達」が位置づけられており、その一つの手段として『名大』が創刊されたと言えるだろう。

では、「言論報導の発達」のために、『名大』は具体的にどのような役割を果たすべきであると考えられていたのだろうか。まずは編集者の立場にあつた学生の期待を見ていきたい。『名大』には毎号、編集者による執筆欄である「編輯室から」が設けられていた。欄名は号によつて少しずつ変化するが、ここでは編集者の立場から『名大』が果たすべき役割について、比喩的な表現を用いながら述べられている。この表現の変化を辿ることによつて、編集者の『名大』に対する期待の変化を読み取ることができる。

第一号では、「この会報「名大」は部会の行進歌である」、「二号からはこの「名大」が快い集会の様な効果を持つ様にした<sup>〔2〕</sup>」と述べられている。これらの表現からは、『名大』が学生会の動向を報じる会報としての役割の他に、名古屋医科大学の学生同士が自由に意見を交換することのできる言論空間を創造する役割を果たすことが期

待されていたことをうかがうことができる。創刊後の約半年間に当たる第五号までの同欄では、「二三の名前がこの名大を占有する時、名大はもう諸君の心から離れたものになる」<sup>(3)</sup>、「名大」は同人雑誌でないのだから、「名大」は学生全体の意志を反映する唯一の学内雑誌である<sup>(5)</sup>、「名大」は歴とした学生部会の機関雑誌である<sup>(6)</sup>と述べられている。『名大』が学生部会の会報であるということと共に、特定の主張を持った学生に偏るのではなく学生全体の自由な意見を掲載していきたいということが表現されており、第一号発行時から連続している期待をうかがうことができる。その後、第六号の同欄では、以下のように述べられている。

音楽に映画に文学に、科学に将又スポーツに宗教に、学生らしい一廉の見識と抱負を披瀝し<sup>(7)</sup> 齊生の意気高き名大生の真摯なる姿を反映せしむる「名大」は、果せる哉、独り学生関係のみの存在に終らせるには余りに社会的反響が大きかつた。見給へ!!如何に大きな波紋の大学の内外を捲席しつゝあるか<sup>(7)</sup>

この引用文からは、『名大』に対する社会的反響の広がりへの意識を読み取ることができる。では、このような社会的反響を受けて『名大』が果たすべき役割への期待にはどのような変化があったのだろうか。第七号以降の同欄を見ると、第一三号で「之『名大』」によつて名大「名古屋医科大学」を外に向つて発展せしむる<sup>(8)</sup>と述べられているが意味がいまいである。そこで対象を「編輯室から」以外にも拡大してみると、第七号の巻頭記事では、「世人は本学を評するに「名大」を以てするであらう<sup>(9)</sup>」と述べられている。この記事は執筆者の名前が明記されていないものの、書かれた内容から判断すると編集者のうちの一人によつて書かれたものと思われる。ここにある表現からは、名古屋医科大学の諸相を学外へと伝達するという『名大』が果たすべき新たな役割への期待をうかがうこと

ができる。このように編集を担った学生においては、第六号以降に学外の読者をより積極的に意識しはじめ、『名大』が果たすべき役割への期待にも変化があったと思われる。

編集者ではない一般の学生にも『名大』に対する期待の変化が見られた。第一号に掲載された記事では、「X、Y、Z」と名乗る者が「研究に講義にとかく散在し勝ちな全学生が同じ様に連絡される『名大』」<sup>10</sup>と述べている。この表現からは、言論空間の創造というほどではないが、『名大』に学生全体をつなぐ情報伝達手段としての役割を期待しており、創刊当初の編集者とほぼ同様の期待をうかがうことができる。では、第六号以降、一般の学生の『名大』に対する期待はどのように変化したのであろうか。第一一号に掲載された「学生希望調査表」では、学生部会の各部会に対して寄せられた学生の希望が述べられている。その中の会報部欄では、「一般並本学会及び他大学のニューズ掲載セヨ」、「会報ノ対外的発展」<sup>11</sup>と述べられている。これらの表現からは、編集者の期待に加えて、『名大』が学外の情報を学内に伝達することが期待されていたことをうかがうことができる。このように一般の学生においても、号数を重ねるにつれて『名大』が果たすべき役割への期待に変化があったと思われる。

以上、誌上から読み取ることのできる、『名大』に期待された役割の変化を明らかにしてきた。『名大』は創刊当初、編集者の立場にあった学生と一般の学生の間で意識の程度に差はあったと思われるが、ほぼ同様の役割が期待されていた。そして号数を重ねるにつれて、編集者の場合は名古屋医科大学の諸相を学外へと伝達するという役割への期待が生まれ、一般の学生の場合はそれに加え、学外の情報を学内に伝達するという役割が生まれたと考えられる。編集者と一般の学生両者の期待を併せれば、『名大』を手段とした情報伝達の範囲を学外にも拡大し、学内と学外を媒介するという役割が期待されるようになっていったと言えるだろう。

## (二) 『名大』を通じた情報交流

『名大』に対する新たな期待はどのような形で表面化したのだろうか。本節では『名大』を通じた学内と学外との情報交流という事実を見ていきたい。情報交流という言葉には、学内から学外への情報伝達、学外から学内への情報伝達という二つの方向を想定しているが、これらはそれぞれ読者範囲の拡大と学外情報の掲載という具体的な現象から指摘できるものである。

まずは、読者範囲の拡大について見ていく。報じられた内容で確認できる限りでは、『名大』は号数を重ねるにつれて名古屋医科大学の在校生、教員の他に三つのグループにおける読者を獲得していったようである。その三つのグループとは、名古屋医科大学の卒業生、他大学の学生、「名大看護婦の組織する清交会」<sup>(12)</sup>である。名古屋医科大学の卒業生の中に『名大』の読者がいたことを、誌上で初めて確認できるのは第九号に掲載された記事においてである。この記事では、「名大」第五号以来毎号御惠贈にあづかり〔中略〕第五号第六号を入手せし当時早速所感を当「東京市部通信」誌上に述べ序に諸君へも郵送せん」という鶴天学友会東京支部からの言葉が掲載されており、読者範囲の拡大という現象の一端をうかがうことができる。他大学の学生および「清交会」についても、それぞれ第一二号の記事において「各大学に配布されゐる「名大」<sup>(14)</sup>、第二一号の記事において「近く会報「名大」<sup>(15)</sup>との連絡をとり」と述べられていることから、『名大』を読む機会のある者がいたと判断することができる。

次に、学外情報の掲載について見ていく。『名大』は基本的に学生会関係欄、学内ニュース欄、学生による随筆等の投稿欄、教員による投稿欄、編集者による執筆欄、広告欄等で構成されていた。注目すべきことは第一四号から第一九号にかけて「各地大学より」<sup>(16)</sup>という全国各地の大学における時事的な出来事を報じる欄が登場していることである。例えば、第一七号では東北帝国大学、東京帝国大学、九州帝国大学、北海道帝国大学、東京工業大学、

東京商科大学での出来事が報じられており、掲載された情報は医学系の大学・学部情報のみに限られていなかったことがわかる。これは「名大」が号を重ねるにつれて、諸方面より寄せられる図書が増した<sup>(18)</sup>ことも関連して他大学の情報が名古屋医科大学に伝えられるようになったためであると思われる。「各大学より」のような欄が登場したことは『名大』を通した学外から学内への情報伝達があつたことを例証していると言えるだろう。

### (三) まとめ

本章では、誌上から読み取ることのできる『名大』に期待された役割の変化を明らかにし、その変化と関連があつたと思われる実際の出来事として『名大』を通した学内と学外との情報交流の具体相を明らかにした。最後に、最終号である第二三号で述べられている『名大』と『鶴天学友会報』とを統合する理由に注目しておきたい。第二三号では以下のように述べられている。

「名大」は専ら学生連絡のものであつたが学生の輿論は之を一步高めて学友先輩との連絡をも之に盛り、更に各地大学の状態をも掲載して学生一般に知らしめるやうになつて来た。

こゝに学友会報の進む途を「名大」の中に取り入れることになり分離して発行することの重複と、単独なものとしての両者の不充分さを指摘するやうになり、全く学生の希望の声として昨年以来合併問題は常に研究されて来た<sup>(19)</sup>

この引用文から読み取れるように、本章で明らかにしてきた『名大』が果たすべき役割への期待の変化と、学内と学外との情報交流という事実は最終的に『名大』と『鶴天学友会報』とを統合する論理の一つにつながつていっ

たと言えるだろう。<sup>(20)</sup>

『名大』は『鶴天学友会報』と統合され『名大学友会報』となった。本章では統合までを分析対象としたため、それ以後、『名大学友会報』がどのような役割を期待されていたのかを明らかにすることはできなかった。今後の課題としたい。

## 注

- (1) 新實藤一「歩一步」『名大』第一号、一九三三年一月、一ページ。
- (2) 竹澤「編輯室から」『名大』第一号、一九三三年一月、七ページ。
- (3) 「編輯室から」『名大』第二号、一九三三年二月、三ページ。
- (4) 「編輯室から」『名大』第三号、一九三三年三月、六ページ。
- (5) 板津「編輯室から」『名大』第四号、一九三三年五月、三ページ。
- (6) 板津「編輯室から」『名大』第五号、一九三三年六月、六ページ。
- (7) 板津「編輯室より」『名大』第六号、一九三三年七月、八ページ。
- (8) 「編輯室は囁く」『名大』第二三号、一九三四年四月、一二ページ。
- (9) 「再び「名大」の使命に就て」『名大』第七号、一九三三年九月、一ページ。
- (10) 「学生大衆は「名大」を支持する」『名大』第一号、一九三三年一月、四ページ。この記事は複数の学生によって書かれた記事であり、「X、Y、Z」はその内の一人である。
- (11) 「学生希望調査表」『名大』第一号、一九三四年二月、四ページ。
- (12) 「名大看護婦の組織する清交会懇親会開かる」『名大』第二号、一九三五年一月、五ページ。

- (13) 会報部「名大魂は呼応する!!」『名大』第九号、一九三三年十一月、七ページ。
- (14) 「今や注視的会報『名大』前途益々通けし」『名大』第二二号、一九三四年三月、七ページ。
- (15) 注12に同じ。
- (16) 欄名は第一六号、第一八号、第一九号が「各地大学便り」となっている。
- (17) 「各地大学より」『名大』第一七号、一九三四年十月、三ページ。
- (18) 山口「編輯室より」『名大』第一四号、一九三四年五月、一〇ページ。
- (19) 「鶴天学友会報と『名大』会報合併の声あがる!!」『名大』第二三号、一九三五年四月、四ページ。
- (20) 『鶴天学友会報』には第一号から第八号には「通信らん」、第九号から第一二号には「通信欄」と名づけられた学外情報掲載欄が設けられており、『名大』の情報伝達機能と同様な点があったと思われる。

## 二 学生からみた『名大』と『鶴天学友会報』との統合問題

学生部会は、独自の会報である『名大』を一九三三年一月から一九三五年四月まで編集・発行し続けた。この期間は、『名大』とともに、学友会の会報である『鶴天学友会報』の刊行も続けられており、名古屋大学医学部会報の歴史の中で、二つの会報が同時併行して発行された唯一の時期であった。こうした発行形態は、学生自身が「他大学に見ても一校一紙は通則である」と述べていたように、当時の大学において珍しいことであったとみられる。しかし、一九三五年十月になると、二つの会報は統合され『名大』と名称を変えることによつて、このような特徴的な試みも終わりを迎えることとなった。

本章では、『名大』と『鶴天学友会報』とのこうした統合を学生自身がどのように捉えていたのかを検討することを目的とする。二つの会報の統合に言及した先行研究として、『名古屋大学五十年史』通史一が挙げられる。この中では、会報の編集をめぐる問題と発行費用に関わる経済的問題が統合の要因であったことが取り上げられている。<sup>(2)</sup>しかし、ここでの記述は統合の理由について簡単に言及するにとどまっており、学生自身が統合をどのように考えていたのかについては詳細に検討されていない。会報の統合は、学生にとって独自の会報を失うことを意味しており、学生自身が統合をどのように受け止めていたのかを明らかにすることは、学生が『名大』にどのような役割や意義を見いだしていたのかを検討する上で重要であると考えられる。

### (一) 「新聞」に拡充するための方法としての統合

『名大』と『鶴天学友会報』を統合しようとする意見自体は、意外にも『名大』が創刊した一九三三年にさかのぼることができる。統合にはじめて言及したのものとして、次のような記事が第二号に掲載されていた。

僕は「名大」を新聞のやうにしてしまひたかつた。然し会報と名の付く以上、どうしても不可能なのた。編輯が自由でない。論評をなす立場が自由でない。これは社会的に一人前と認められてゐる筈の僕達が、法律の定むる範囲より更に又一つのフレイムを置かれてゐるのだ。もし鶴天学友会発行の新聞となればこのフレイムを完全に取り去る事は出来な  
いとしても、少くとも倍以上のゆるやかさを内容に、経済的には会報の半額以下になし得る。昭和何年度かの会報代は千円近い金を費つてゐる。新聞なれば広告費の活用で月三十円も予算すれば充分である。<sup>(3)</sup>

このように『名大』を会報ではなく、より自由な編集と論評が可能となる媒体である「新聞」に格上げするとが学生によつて主張された。その際に、鶴天学友会と共同して、新たに一つの「新聞」を発行する方法が財政的に実現可能な具体案として挙げられていた。「毎月一回の新聞紙上でお互に話し合ふ事がどんなに有意義であるか、まあ新聞を試みに作るが良い」<sup>4</sup>とも述べられていたように、統合した「新聞」は月刊で発行することが想定されていた。<sup>5</sup>さらに、同号の編集後記では「もし鶴天学友会と一しよになつて新聞大のものを発行する事が出来れば、見違へる様になるだらう、それには、諸君が「名大」を学友会新聞に飛躍させる様声を合せねばならない」<sup>6</sup>とあり、先の第二号の主張が肯定的に受け止められていたことがわかる。これらの主張から、学生たちが『名大』と『鶴天学友会報』との統合という方法を用いて、『名大』を「新聞」に発展させることを考えていたことが読み取れる。

## (二) 大学の「新聞」に拡充するための統合

『名大』が一九三五年まで発行され続けたことからわかるように、『名大』と『鶴天学友会報』を一つの「新聞」に統合することは、すぐ実行に移されることはなかった。統合とは異なる方法で『名大』を充実させる試みが行なわれた。その一つが、一九三三年九月に『名大』の編集業務を、学芸部から新設された会報部に移したことであった。会報部長の山川幸男は、会報部の独立について以下のように述べていた。

此の〔学生〕部会が其の道程に於て会報部を独立せしめた事は会報の重大性が独り会報自身の為のみでなく部会を全面的に伸展發育する事の爲にも必要な事で有つた。〔中略〕而して次々に発刊される此の会報が日と共に新に度と共に充実に伸張されて行く事を学生諸君が感じて居られる事を信じて良いと思つて居る<sup>7</sup>

山川は、『名大』を学生部会の拡充にとつて重要なものとして位置づけており、『名大』をより発展させていくために、会報部を独立させることが必要であつたと考えていた。一方、こうした状況下においても、『名大』と『鶴天学友会報』を統合して「新聞」を作ろうとする希望も出されていた。そうした希望は、在学生にも『鶴天学友会報』の配布が予定されていることを伝える第一一号の記事の中で次のように述べられていた（傍線は筆者、以下同じ）。

吾々としてはこの会報〔鶴天学友会報〕が益々発展充実学生部会報「名大」全国各支部通信の機能をも兼備せる大学新聞の形式にまで一日も速に育成され、真に学内外の連絡機関として完成され月刊更に進んでは日刊にまで編成され進展極りなき大学日々の動静を細大もらさず報導されることを名大文化事業発展のため切望するものである。<sup>⑧</sup>

このように学生は、『鶴天学友会報』が月刊もしくは日刊の「大学新聞」になることを期待していた。その際に、この「新聞」が『名大』と全国各支部の通信機能の役割も兼備するというように、一つの「新聞」に統合されることを念頭に置いていた。学生の記述が少ないこともあり、なぜ「新聞」になることを要望し、さらに統合を考慮に入れていたのかどうかを明確にすることは難しい。<sup>⑨</sup>しかし、こうした統合を要望する背景には、少なくとも大学の「新聞」となるためには、その「新聞」が学生部会・在学生にとどまらず、学友会・卒業生のことも扱う必要があるという前提があつたように思われる。例えば、『名大』の最終号となる第三号の編集後記では、次のような記述があつた。

吾々の「名大」も元来一つのもの、片側しか望み得なかつた不満があつた。学友会側の会報にも外部先輩より学生の状況を知りたいと云ふ要求を十分に満たし得ず共に統一された充分な使命遂行をかねてより考へてゐたのでしたが愈々其の気運に乗つた今日此の合併問題は必ず実現させて行き度いと願つてゐる次第です<sup>19</sup>

この主張が、先に取り上げた第一一号の記述から約一年後であり、実際に統合に向けた準備が行なわれる時期にされたものであることは留保しなければならぬが、ここでは、『名大』が「元来一つのもの、片側」と評され、『名大』が主に在学生に関することのみを扱っていることから、大学の会報として不十分であることが述べられていた。この第二三号の主張を踏まえれば、第一一号で示されていたような統合の背景には、学内外全体を包括する内容をもつた大学の「新聞」を発行したいという希望があつたと推察することができる。

こうした統合の根拠は、第一節で検討した統合の理由づけと異なっている。第一節でみた論拠は、編集や論評の自由のために「新聞」になることに主眼があり、あくまで統合はそのための有力な手段として位置づけられていた。それに対して、本節でみてきた第一一号や第二三号の論拠は、学内外全体を包括する大学の「新聞」であることを強く求めており、その点では統合を全面的に押し出した主張であつたといえよう。

しかし、本節でみてきた統合の理由づけも、統合後に新たに発行される「新聞」において、『名大』の役割である在学生に関する情報を伝えることを継続することを前提としていた。つまり、学生は、『名大』が果たしてきた意義や役割が、新しい「新聞」において失われるとは考えていなかつた。それゆえ、『名大』を拡充しようとする動きと、『名大』を『鶴天学友会報』と統合したいという希望は、相反するものではなかつたのである。

### (三) 統合の実現と統合後の懸念

第一号を最後に、『名大』と『鶴天学友会報』との統合問題はしばらく記事とならなかつた。二つの会報の統合に関する記事は、『名大』の最終号となる一九三五年四月に発行された第二三号において誌面に現れることとなつた。その一つが第二節で取り上げた記事であり、ここではもう一つの記事を参照しよう。

こゝに学友会報の進む途を「名大」の中に取り入れることになり分離して発行することの重複と、単独なものとしての両者の不充分さを指摘するやうになり、全く学生の希望の声として昨年以來合併問題は常に研究されて来た。「中略」合併の必要は満場一致賛成の声を聞きつゝも時期の問題と合併後の問題とに妨止されて来たが、今や着々として各方面に交渉しつゝ、近く草稿脱稿されこゝに合併の氣運を一路邁進することになつた<sup>1)</sup>。

この記事から、『名大』と『鶴天学友会報』の統合が、学生によつて積極的に推し進められていたことと、統合自体に対して批判がほとんどなかつたことがうかがえる。すでに第一節、第二節でみてきたように、学生は二つの会報を統合して「新聞」を作ることには希望を述べており、大きな批判がなかつたことは当然であつたと考えられる。一方で、この記事の中では、後述するように、統合の懸念事項として統合後をどうするかという課題が存在していたことが示唆されている。

その後、二つの会報の統合に向けた具体的な話し合いが進められ、一九三五年七月の『鶴天学友会報』の記事において『名大』と『鶴天学友会報』の合同が成立したことが伝えられた。同記事の中で、「愈々本会報は大学新聞として活躍するの時代となり、新名称を以て十月より月刊として学友並学生諸氏の重要連絡機関として活躍するで

「あらう」というように、学友会の見解ではあるが、新しい会報は「大学新聞」に準ずるものとしてみなされていた。<sup>12)</sup> この点を踏まえれば、学生の希望は達成されたこととなる。

しかし、ここまでみてきたように学生は、統合して新たにできた「新聞」においても、『名大』と同様に在學生が主体的に関わる部分が残されることを必要とし、また『名大』が果たしてきた意義や役割が失われるとは考えていなかった。そのため、統合に賛意を示していたものの、一方で統合後によって、学生が果たす役割や影響力の低下を招くといった不安や懸念が意識されることとなった。当然ながら、学生にとつて独自の会報『名大』を失うことは、これらの危険性をはらんでいた。そうした危惧が、二つの会報を統合して発行された『名大友会報』の創刊号において、学生部会の理事長を務めていた山口正によって以下のように述べられていた。

鶴天学友会報と名大と夫々に自主独立の割拠状態に位置して、独自の目的と機能を發揮して歩み来つた最近に於て、合  
同の気運が具体化せられたるにつき錯離した交渉の結果漸くに合一、学友会会報の発刊を見るに到つた。単一なる会報  
に依り、若干に分派した異つた目的と機能とを有する機関が果して全き進展を保持し得るかに就いては尚杞憂を懐き  
つゝも、合同発刊の根本義には賛意を捧げる。<sup>13)</sup>

この記事は、二つの会報の統合後に執筆されたものであるが、管見の限り、学生自身が統合に対して明確に懸念を表明した唯一のものであった。山口は、『名大』と『鶴天学友会報』の統合自体に賛意を示しているものの、両者には異なる目的と機能があるとし、統合が上手くいくがどうか不安を示している。さらに、「錯離した交渉の結果」というように、統合を具体的にどうするか議論の際に、すでに何らかの対立があったことも示唆されている。

彼はこうした懸念を述べた上で、実際に単一の会報である『名大学友会報』をどのように編集していくかについて次のような要求をしていた。

各々独立した目的を有する二つの機関（学生部会と鶴天学友会）が会報合同に結果する目的の変更は考へられない。この変更されざる目的を如何なる協同的形式を以て実現して行くかは熟慮さるべき点であるが、新生会報部の所屬が学友会評議員会にも学生部会理事会にも存在してゐるのは確固たる自主を誇る二機関の中間的折衷策の様でもあるが、更に強力なる統率機関の出現せざるか、或は従來の合同理由とは全然別箇の重要理由の湧出せざる限りこの部らしき会報部を統率する理想的単一機関の推戴は望み難い。この二機関に統率さるゝ会報部が各々の所屬統卒機関の主張を調整するに就いては、会報部が両機関の鉄鎖であるだけ、言動慎重を要する。実際に於て、評議員会及び理事会から分立したかの感を与へるこの機関に従事される役員方は這般の消息を斟酌考慮して活躍せられんことを望む<sup>14</sup>

ここでも、彼は明確に『名大』と『鶴天学友会報』の異なる目的を維持していくことを念頭に置きつつ、新しい会報の編集のあり方に言及していた。具体的には、『名大』が新しい会報においても独自の役割を担えるように、学生部会の編集に大きな影響を与える新しい会報部に対して配慮を求めていた。結果として、二つの会報は統合されることになったものの、新しい単一の会報の中で、どのように『名大』の目的・役割を維持するかが模索されたのであった。彼の意見は、独立した会報はなくなつたものの、統合後にも『名大』がもつていた独自の役割・意義を継続しようとすることを明確に主張するものであった。

#### (四) まとめ

本章では、『名大』と『鶴天学友会報』との統合を学生自身がどのように捉えていたのかということを検討してきた。『名大』が発行された当初から、『名大』と『鶴天学友会報』を統合して、一つの「新聞」を新たに作りたいという学生の希望が表明されていた。そうした背景には、『名大』が編集や論評の「自由」を獲得するために、「新聞」という媒体になることを求めて、統合をそのための有力な手段として見なしていたことや、二つの会報の統合によって学内外全体を包括する内容をもった大学の「新聞」を発行することへの要望があった。

これらの学生の希望は、実際に二つの会報が統合されることとなり、新たな『名大』が大学の「新聞」としての位置づけが与えられていたことから、結果として学生の希望はかなえられることとなった。しかし、学生は統合して新たにできた「新聞」においても、『名大』と同様に在学生が主体的に関わる部分が残されることを前提とし、また『名大』が果たしてきた機能を重要なものであるとみなしていた。そのため、統合自体には賛成していったものの、一方で統合後に、学生が果たす役割や影響力の低下が生じることへの不安や懸念が意識されることとなった。このことは、学生部会の理事長であった山口正が執筆した『名大』の記事にはつきりと表れていた。彼は、その中で新しい会報においても『名大』が今まで果たしてきた独自の目的・役割を持ち続けられるように、編集に大きな影響を与える新会報部に対して配慮を求めている。

確かに、統合の結果、学生独自の会報である『名大』という媒体を失うこととなった。しかし、『名大』の目的・役割を統合後も残すことが学生によって試みられていた。このことは、『名大』が『鶴天学友会報』に吸収されたのではなく、対等な立場での統合を果たそうとしていたことを意味していた。こうした学生の態度は、約二年間独自の会報である『名大』を発行し続けたことによって培われたものであり、『名大』の果たした役割・意義は大きかつ

たといえよう。

### 注

- (1) 山口正「合同発刊を斯く観る」『名大校友会報』第一号、一九三五年十月、二二ページ。
- (2) 名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史二、一九九五年、二四八ページ。
- (3) 「鶴天学友会よ新聞を発行せよ」『名大』第二号、一九三三年二月、三二ページ。
- (4) 同前。
- (5) 一九三三年七月になると、『鶴天学友会報』は年二回から年六回に拡充され、誌面も「新聞」形式に変更されることとなった(葛谷貞二「発刊に際して」『鶴天学友会報』第一号、一九三三年七月、一ページ)。
- (6) 「編輯室から」『名大』第二号、一九三三年二月、三二ページ。
- (7) 「学生会一年の回顧」『名大』第一〇号、一九三三年二月、四四ページ。
- (8) 「遂に吾等の手にも鶴天学友会々報配布か」『名大』第一一号、一九三四年二月、三三ページ。
- (9) 「新聞」を旨指した理由の一つとして、発行頻度が関係していると考えられる。当時、『鶴天学友会報』は隔月刊であり、それを月刊、さらに日刊までにしようとしていたことは、発行頻度の増加を意味していた。
- (10) 「編輯後記」『名大』第三号、一九三五年四月、八ページ。
- (11) 「鶴天学友会報と「名大」会報合併の声あがる!! 目下着々交渉中」『名大』第三号、一九三五年四月、四四ページ。
- (12) 「本学友会報」「名大」との合併成立す 新名称を以て十月より月刊となる『鶴天学友会報』第一二号、一九三五年七月、六六ページ。
- (13) 注1に同じ。
- (14) 同前。

### 三 名古屋医科大学における「選手制度」論争

名古屋医科大学鶴天学友会の下部組織であった学生部会の「運動部」は、全学生を単位として校内スポーツ大会やプールの開放、知多郡野間村での合宿などを企画する「第一部」と、対外試合や大会出場などを行なう、各倶楽部を統制する「第二部」によって構成されていた。当時、旧制高校や大学の部活動・運動部においては「選手制度」をめぐる議論が行なわれており、名古屋医科大学においても同様であった。高橋佐門によれば、「選手制度」とは、「少数の特定者が、特別の条件に支えられ、特別な訓練を受ける」制度である。そのため、「それ以外の一般の者が、自分の娯楽や健康のためにその部に加人するということ」を不可能にするものであった。<sup>(1)</sup> このような「選手制度」は、明治三十年代後半にはすでに成立しており、大抵の高等学校に例外なく設けられていたという。大学でも高等学校と同様だったとみられ、実際、『東北大学五十年史』では、大学の名を代表する「選手」が特別に養成されていたことと、そのことへの反対意見が存在したことが記述されている。<sup>(2)</sup>

一方、名古屋医科大学についての先行研究では、学生部会が「選手制度」の改革に取り組んだと指摘されるにとどまっております<sup>(3)</sup>、その具体相は明らかにされていない。そこで、本章では、上述の社会状況において、名古屋医科大学が「選手制度」をめぐるいかなる議論を行なったのかを『名大』を通して明らかにすることを目的とする。

#### (一) 運動部組織の概要

本節では、運動部組織の概略を組織・構成団体・会計の点から確認しておこう。組織についてだが、名古屋医科

大学の「運動部」は当初、「選手制度」を完全に棄却し「スポーツの大衆化」をスローガンに成立した。一方で、それぞれのスポーツを行なう者たちが独自で倶楽部を結成し、倶楽部同士をまとめるような一つの団体を設立しようとする動きもあつた。しかし、「運動部」との関係を考慮に入れた結果、倶楽部は「運動部」の統制下に入ることとなつた。<sup>(4)</sup> 図らずも「運動部」は、ある競技を専門に行なう倶楽部団体をその組織内に抱え込む形となつたのである。それゆえに、「運動部」は全学生を会員とする「第一部」と各倶楽部を統率する「第二部」によつて組織されることになつた。「第二部」に所属している人は必ず「第一部」にも所属しているという仕組みである。

次に構成団体であるが、「第一部」は全学生構成であるため、「第二部」を確認しておこう。『名大』第五号においては「運動部」関係団体として角力部・ホッケー部・馬術部・柔道部・庭球部・剣道部・射撃部・野球部・山岳部・卓球部・水泳部・ヨット倶楽部・スキー倶楽部・籠球部・自動車部が挙げられている。これらが「第二部」の統括下にあつた各倶楽部にあたる。会員数が最も多いのがスキー倶楽部で五五人、次に野球部で三一人、その次の卓球部が三〇人と続く。<sup>(5)</sup>

最後に会計面であるが、一九三三年の学生部会支出決算を見ると「第一部」には全体の約一九パーセント、「第二部」には約二八パーセントの予算が割り振られており、合計すると全体の半分弱を「運動部」への支出が占めていたこと、また「第二部」により多くの予算が割り振られているのがわかる。<sup>(6)</sup> しかし、一九三四年においては、「第一部」に全体の約一一パーセント、「第二部」に約一二パーセントの予算割当となつており、大幅に予算が削減されていたようである。<sup>(7)</sup>

## (二) 論争前期―「選手制度」をめぐる対立

本節では「運動部」への意見が大きく変わる第一四号を境として、第一号から第一三号までを前期、第一四号から第二三号までを後期と分類し、前期における「運動部」をめぐる論争を見ていく。

前期においては、「選手制度」の是非をめぐる論争が行なわれた。T生は「選手制度」が体育増進といった「スポーツの本質」と乖離し、技術の進歩にのみ執着するようになることを批判する。そして、「スポーツの本質に立ち、腐敗し行く現代社会のとりことなった選手制度をものゝ見事に打ち破った」名古屋医科大学の「運動部」を高く評価している。<sup>8)</sup>ここでは、「選手制度」は「悪」であり、名古屋医科大学が「選手制度」を放棄して成立したことが確認されている。一方で、「運動部」成立初期に刊行された第四号においてすでに「選手制度」を是とするような意見も提示されていた。運動委員の住田英信は「運動部」には「運動の大衆化と選手制度の關係」が避けられない大きな問題としてあると指摘する。住田は、安直な「選手制度」批判を批判して以下のように述べている。

お互の気持を理解し合った特定の人々が体育の向上と精神の修練とを目的としその目的を達成する一つの手段又は支点としての戦ひに勝を制せんため、一定の規約に従つて訓練を受けると云ふこと―そのことが本質的に排斥さるべきことであらうか?<sup>9)</sup>

住田は「選手制度」の悪い例だけに目を向けるのではなく、それがスポーツにもたらす利点にも注目して議論を行なうべきだと述べ、「大衆の中に融合した選手制度の存在」を主張していた。<sup>10)</sup>

このように相矛盾した「選手制度」への評価は、昭和八年十二月に行われた各部会に対する学生希望調査票から

も読み取ることができる。この中で「運動部」に対しては、「選手制度を認めず」という要求と「選手制度を第一にすべし」という相矛盾する要求が提出されていた。<sup>11)</sup>しかし、「運動部」の成立時において「選手制度」を完全に棄却することが決定されていることに鑑みれば、前者がより影響力を持つていたのではないかと推測できる。以上のことから、「学生の大衆化」を意図して結成された「運動部」において「選手制度」との決別が唱えられた一方で、「選手制度」の復活を望む学生も一定数存在していたことがわかる。

### (三) 論争後期——「選手制度」概念の変容

前期においては「運動部」を批判する論者はほとんど存在しなかったが、後期においては徐々に「運動部」組織の現状を批判する者が増えていく。そのきっかけとなった記事が第一四号・一五号における八木忠雄の記事連載である。八木は一般的に言われる「選手制度」批判に対して、「当愛知医科大学時代乃至は名古屋医科大学に於て此種の忌むべき事実〔「選手制度」の弊害〕が認められるであろうか」と反論する。「比較的学生数の僅少な本大学にては運動をする人即ち選手」であつたので、一般的に言う「選手制度」も存在しなかつたし、その弊害もなかつたといふのである。<sup>12)</sup>また、現在の「第一部」、「第二部」という区別をしていては、「運動の大衆化」は実現できないと主張する。ゆえに、八木は「第一部第二部の差別を廃止して不必要に煩雑重複的な組織を廃し各運動種目を凡べて同一の統制下に置く」もしくは「第一部」を「現在の第二部所属団体の統制下に置き運動部は更にもその上に立つてそれ等の団体を統括する」ことを提案する。<sup>13)</sup>

上記の八木の批判を皮切りに、次々と「運動部」批判が現れてくることになる。第一六号で半田宗一は「第一部」を利用してゐる人間が、実は「第二部」の人間や一部の熱心な学生に限られることを指摘して、「第一部といふ組

織その物が幽霊」となっていることを暴露し、第一九号では竹澤徳俊が「第一部」によつて企画される校内大会などの「種々の種目で活躍するのは、少数の同じ顔触れに過ぎない」ことを問題視した<sup>15</sup>。また、第一六号で河島勇は設立当初の「運動部」制度は理想論であり、現在「第一部第二部はその存在の意議極めて不明」となっていると批判する。この状況を打破するためには、「第二部」を改善し、新しく「選手制度」を創案する必要があると唱えた。同じような主張は第一九号にも見受けられ、A T生なる人物が「校友会の運動部が真に学生一般の体育を考へる時にはどうしても学生を各運動部へ強制的に入部させて、その監督下に強制的にやらせねば駄目だ、只漫然と道具を設備したからやれ」と云ふのは効果が薄い」と主張した<sup>17</sup>。

以上の主張からわかるように後期においては、「第一部」もしくは「運動部」自体が批判的とされ、「スポーツの大衆化」の実現を妨げていると批判された。そして、その打開策として提案されたのが「運動部」成立当初は否定されたはずの「選手制度」の復活であつたのである。しかし、ここでいう「選手制度」とは、当時世間で問題視されていた、ある一部の者にのみ予算を多く割いて優れた練習環境を提供するものではなかつた。それは、名古屋医科大学生全員を何らかの倶楽部の「選手」として取り扱い、「運動部」が彼らを一元的に統括するという仕組みであつた。以上のように、『名大』上の議論は、世間一般に広がつていた「選手制度」概念を変容させ、名古屋医科大学独自の「選手制度」を提唱するに至つたのである。

#### (四) まとめ

以上『名大』誌上の論争からわかることは、「スポーツの大衆化」という目的がすべての論者の中に共通してあり続けたということである。論争前期においては「スポーツの大衆化」のために成立した「運動部」において、「選

「手制度」の放擲の原理が示される一方で、「選手制度」なくしてスポーツの「真価」が発揮されるのかを疑問視する論者も存在していた。論争後期においては、「スポーツの大衆化」のために、機能不全に陥っている「第一部」を改革する必要がある、そのための手段として「選手制度」の導入が検討されていた。しかし、ここで新しく唱えられた「選手制度」とは、当時多くの学校で問題とされていた一部の「選手」だけに予算を集中する精鋭主義的な制度ではなく、すべての学生がスポーツに親しむためにすべての生徒を何らかの倶楽部の「選手」として扱うというものであった。つまり、「名大」誌上において展開されたスポーツを巡る議論は、目的を「スポーツの大衆化」とし、それを達成するための手段を名古屋医科大学独自の新たな「選手制度」に求めるという形で、弁証法的過程を経て一応の結論に達したと言える。なお、このような議論が実際の「運動部」組織にいかなる影響を与えたかについては明らかにすることができなかった。今後の課題としたい。

#### 注

- (1) 高橋佐門『旧制高等学校研究 寮歌・校風論篇』昭和出版、一九七八年、一五二ページ。
- (2) 東北大学編『東北大学五十年史』下巻、一九六〇年、二七八～二七九ページ。
- (3) 神谷昭典『日本近代医学の相剋―総力戦体制下の医学と医療―』医療図書出版社、一九九二年、一三三ページ。
- (4) 運動部委員「運動部について」『名大』第一号、一九三三年一月、五ページ。
- (5) 「運動部関係団体」『名大』第五号、一九三三年六月、八ページ。
- (6) 「昭和八年度学生会支出決算」『名大』第一五号、一九三四年六月、五ページ。
- (7) 「会計部の知らせ」『鶴天学友会報』第一〇号、一九三五年一月、一一ページ。
- (8) T生「スポーツの本質に立ちて」『名大』第一号、一九三三年一月、六ページ。

- (9) 住田英信「運動部はそして運動部を!! 主として委員の立場に立つて」『名大』第二号、一九三三年二月、四ページ。
- (10) 同前。
- (11) 「学生希望調査票」『名大』第一号、一九三四年二月、四ページ。
- (12) 八木忠雄「学生会再検討(主として運動部組織に就いて)」『名大』第四号、一九三四年五月、九ページ。
- (13) 八木忠雄「学生会再検討(2) 主として運動部組織に就いて」『名大』第五号、一九三四年五月、八ページ。
- (14) 半田宗一「運動部組織に就いて」『名大』第一六号、一九三四年六月、一ページ。
- (15) 竹澤徳俊「学生の話」『名大』第一九号、一九三四年十二月、六ページ。
- (16) 河島勇「学生会再検討を読み 運動部組織に就いての所感」『名大』第一六号、一九三四年六月、一二ページ。
- (17) A T 生「常に結論は簡単の様で面倒くさい」『名大』第一九号、一九三四年十二月、六ページ。

#### 四 『名大』にみる杉田直樹の医育観

『名大』は学生会の会報ではあるものの、教員の手による文章も掲載していた。中でも名古屋医科大学(以下、名医大)精神科の初代教授として知られる杉田直樹は、第九〜一九号にて「迷題惑語」と題した連載をもち、第六号に「学生生活の時期」、第二〇・二一・二二号に「猟書生活」を寄稿するなど誌上の常連であった。本章ではこれらの記事をもとにして、杉田の医育観を析出する。

杉田の略歴は次の通りである。一八八七年九月に東京市で生まれ、一九〇八年に第一高等学校第三部を卒業、一九一二年に東京帝国大学医科大学医学科を卒業した後、同大学精神病学教室副手嘱託となった。一九一三年九月

一九一八年五月には文部省外国留学生としてドイツ、オーストリア、フランス、アメリカに留学し、帰国後は東京帝大助教、東京帝大医学部講師、東京府立松澤病院副院長を歴任した。名医大の教授となったのは一九三一年五月で、一九四九年七月まで勤めた。同年九月、狭心症によつて六三歳で死去した<sup>(1)</sup>。杉田の業績は、脳髓の形態学的研究、精神分裂病病因研究に加え、障害児保護施設八事少年寮の経営に代表される小児精神医学研究の三つに大別できる<sup>(2)</sup>。

## (一) 杉田直樹と『名大』

そもそも杉田が誌上の常連となつたのは、彼が学生会会報部の顧問だつたためだと考えられる<sup>(3)</sup>。編集後記等学生の手による記事からは、杉田が記事の寄稿にとどまらず、(一) 会報部座談会の開催、(二) 懸賞論文の審査長、(三) 『名大』編集作業への参加という形で『名大』づくりに密接にかかわつていたことがうかがえる。

(一) については「杉田教授中心の会報部座談会」と表現されるなど、杉田中心のものであつたようである。(二) については杉田が「審査長」に据えられていたことに加え、懸賞論文の応募が奮わなかつたことに対して杉田が怒りと落胆を表明していることから<sup>(4)</sup>、杉田が主体的に関わつた事業だつたと思われる。(三) については会報部員が「直接之」「『名大』」が編輯の指導に貴重なる多くの時間を与へられる杉田顧問の御好意」と述べており、杉田の指導の下で編集作業が行われていたことが見てとれる。以上から杉田は、顧問として会報部の活動に非常に熱心に携わつていたと言える。

先行研究によれば、杉田は第一高等学校在学中から文芸に造詣が深かつた。文芸部に所属し、谷崎潤一郎や和辻哲郎とも親交があつたという<sup>(5)</sup>。名医大赴任後は「名古屋在住の文化人を主とした「哲学倶楽部」や「カルチュア」

クラブ」の中心メンバーでもあった」ようで、退職に際して「もうしばらく名古屋にとどまり地元の文化活動に尽くすか、それとも東京へ戻るかと悩んだ」ほどだったという<sup>9)</sup>。これらを考慮すると、杉田が『名大』に強い関心をもち会報部の顧問を熱心に務めたのにも頷ける。

このように、杉田が『名大』に深くかかわった背景には自身の文芸好きもあつたと思われるが、それだけではなかつた。そこには教員の立場から『名大』に寄せる大きな期待があつた。第一二号の「迷題惑語」には次のような記述がある（傍線は筆者、以下同じ）。

○学者は人事百般の学であり医人はもつと／＼話題と趣味との広がるべく高かるべきものと私共は考へてある。案外医人の話題の狭いといふ事実のものは、つまり学生時代の教養の弊に帰せらるべきものではなからうか○茲に於て我が名大の存在は学生諸氏の「人間性能」の修養の上に重大なる教化機関として真の職責があるのではないかと思ふ。そこで大学も学友会も之を認識したり、もつと「名大」の爲めに資財と労力とを注いでその発展を実現せしめ、名医大学生教化機関としての実を完全に挙げ得るやう、他大学にさきがけて進出を見せて戴きたいと考へる<sup>10)</sup>

引用が示すように、杉田は『名大』が名医大生の「教化機関」たることを期待していた。つまり杉田にとつて、『名大』への関与は教員としての教育活動の一環であつたと言える。したがつて『名大』上の彼の記事は名医大の学生に向けたものであり、そこには彼の医育観が反映されていたと考えられる。以下このような視点から、杉田の書いた記事を詳細に見ていく。

## (1)「徳」のある医師の養成

杉田の記事には「医は意也」という言葉が度々登場する。はじめにこれをキーワードにして杉田の医育観に迫ってみたい。以下に『名大』第二〇号と第一三号の「迷題惑語」を引用する。当時の名医大生の姿も垣間見えるため、少し長く引用する。

○斎藤教授の言をきくに、学生諸君の多くは外科臨床講義の聴講に当り、講義の間のみ謹聴してゐて手術が始まると共に退席して了ふ者が甚だ多いとの事であるが、之は大いなる心得違ひと云はねばならぬ○学生時代に外科手術を陪観していくら聴講席から双眼鏡でのぞいてゐても、手術創面の細かい操作が到底理解出来る筈はない唯、此の際学ぶべきことは、手術の始めから終り迄の手術者の態度と心の配り方の要諦である○如何に消毒に留意すべきか、如何に器具を処理すべきか、如何に刀を運び、如何なる速度で切開し、如何に後処置に遺漏なきやう注意を払ふべきか、その段取と術者の一意専心の真剣さと又一毫をも忽せにしない細心の注意と、その精神を学び得れば足る○それにはカラ講義や教科書読を千万遍くり返し得も効はない。臨床講義は病症そのものの理論を講述するため〔にし〕てるのではなく、診断の際の考へ方、患者の实地の扱ひ方患者に対する夫々の専門立場から殊殊の診療態度を、実際に体得せしめるのが主眼である○臨床講義を一々細かく筆記する要はない、恐らく臨床講義に出されたと同一の病症に、諸氏は实地に再会することとは稀であらう。「医」を学ぶは蓋し「意」を学ぶに在る<sup>1)</sup>

患者は何よりも医師や看護婦の深切を徳とする、学生時代に科目中に医道乃至医科倫理学 Medizinische Ethik の顧みられないのは医人の将来を考へて私は甚だ物足りなく思ふ、度々云ふことだが「医は意也」であつて必ずしも知識や技術

のみではない、非医者も時に繁昌する所以である<sup>12)</sup>

ここから杉田が、「理論」の修得に偏り、講義には出席するが手術陪観は欠席するという学生の状況を憂慮していたことがわかる。これに対して「理論」及び「知識」や「技術」のみでなく「意」を学びとるよう説いたのである。「意」とは具体的には、「手術者の態度と心の配り方」「術者の一意専心の真剣さと又一毫をも忽せにしない細心の注意と、その精神」「診断の際の考へ方」「患者の実地の扱ひ方」「診療態度」を指していた。

二つ目の引用に見られる「医道」という言葉も、杉田が度々用いたキーワードである。同時期の『鶴天学友会報』では、「医道」とは「医師が医業を行ふに当り患者に対する徳義的関係を定むるもの」だと説明されている。<sup>13)</sup>以上から杉田は、自らが患者に相對する者であることを自覚し、「知識」や「技術」を「徳」をもって發揮する医師を理想としていたと言える。このように杉田がことさらに「徳」の重要性を説いた背景には、名医大における医育のあり方への不満があつたと見られる。

名古屋医科大学も官立大学に移管されて益々大学たる使命に精進するやうに現職員及び学生一同が覚悟を固めねばならないと思ひます。大学たる使命と私の申しますのは深く學術の濫奥を極め、国家の進運に貢献すると共に高邁なる人格の達成を期することでありまして、単に職業的の医師を養成し、又は医学知識の普及を図るといふのみでは、大学として十分な職責をつくしたとは申せませんまい〔中略〕現今の学制では大学に於て此の医道医制に関する医魂の教養が、大学令の第一条に明言してあり乍ら實際上少しも関心されて居らないのは私の大に遺憾とする所であります<sup>14)</sup>

引用は、杉田が名医大の「使命」を単に「職業的の医師の養成」や「医学知識の普及」ではなく、「高邁なる人格」が達成された医師の育成に求めていたことを示している。しかし、名医大では「医道医制に関する医魂の教養」を育てることに関心が払われていなかったようで、杉田はこれが不満だった。杉田のいう「高邁なる人格」がどのようなものであったのかについては、次の引用から看取できる。

今年度本学入学考査の成績を洩れ聞くに、〔中略〕私共に甚ださみしく思はれることは文学、思索、芸術の方面に観賞力と創作力と批判力を持つてゐると標榜する人が廖々曉星の如くであつた一事である、之も入学以来如何なる趣味でも之から涵養することも出来やうが、少なくとも芸術と思索とは近代人の常識として人格の完成上最も必要のものであり、意義ある人生創造の原動力となるべきものと私共は考へてゐる。<sup>15</sup>

つまり杉田の想定する「人格」とは、「芸術と思索」によつて完成されるものであり、「文学、思索、芸術の方面」での「観賞力と創作力と批判力」の涵養を学生に求めていた。杉田が「文学」と「芸術」をいかに重要視していたかは、次の文章にも表れている。

医科学生は日々の教科目の学習の間自体を練る運動の間に、もしも趣味に浸る時間を持つならばもつとく、人生と親しみ且之を研究し、そして他人の人生を指導する事に興味を持たねばならないと思ふ。人生と最も深い関係を持つ学術は、医学を除いては第一に文学がある芸術がある。其処には社会人の心も個人の内も、又個人が社会人へ対して働きかける実相も何れも深く美しく刻まれてゐるのである。<sup>16</sup>

このように杉田の医育観は、「文学」や「芸術」によつて「人格の完成」が達成された「徳」のある医師の養成を旨とするものだった。

### (三) まとめ

本章では杉田直樹が書いた『名大』誌上の記事をもとに、彼の医育観を検討してきた。杉田は『名大』を名医大生の「教化機関」だと捉えており、記事の寄稿のみならず、会報部の顧問としてその活動に深く関与していた。『名大』誌上の杉田の記事には「医は意なり」や「医道」という言葉が度々登場しており、自らが患者に相對する者であることを自覚し、「知識」や「技術」を「徳」をもつて發揮する医師を理想としていたことが見てとれた。さらに、杉田が「文学」や「芸術」による「人格の完成」を重要視していたことも明らかになった。

同時代の他の医大教授の医育観との比較、あるいは杉田が「医道」の欠如として批判した医大のカリキュラムの実態についての検討が今後の課題である。

### 注

- (1) 「杉田教授略歴」『名古屋医学会雑誌』第六三卷第五号、一九四九年十月。
- (2) 岸本謙一「杉田教授の業績について」『名古屋医学会雑誌』第六三卷第五号、一九四九年十月。
- (3) 「編輯室より」『名大』第一二号、一九三四年二月、一〇ページ。及び「晴れの入学を喜び会報部は諸君の新しき抱負を待つ」『名大』第一三号、一九三四年四月、七ページ。

- (4) 「杉田教授を囲んで」『名大』第一六号、一九三四年七月、六ページ。
- (5) 「編輯室は囁く」『名大』第一二二号、一九三四年三月、一二ページ。
- (6) 「迷題感語」『名大』第一四号、一九三四年五月、二二ページ。
- (7) 「晴れの入学を喜び会報部は諸君の新しき抱負を待つ」『名大』第一三三号、一九三四年四月、七ページ。
- (8) 山崎由可里「杉田直樹の名古屋医科大学教授就任」『名古屋大学史紀要』第六卷、一九九八年。
- (9) 同前、六二ページ。
- (10) 「迷題感語」『名大』第一二二号、一九三四年三月、三二ページ。
- (11) 「迷題感語」『名大』第一〇号、一九三三年十二月、二二ページ。
- (12) 「迷題感語」『名大』第一三三号、一九三四年四月、二二ページ。
- (13) 杉田直樹「医の唯物観的傾向を悲しむ」『鶴天学友会報』第七号、一九三四年七月、一ページ。
- (14) 同前。
- (15) 注12に同じ。
- (16) 杉田直樹「学生生活の時期」『名大』第六号、一九三三年七月、二二ページ。

## 結びにかえて

本稿では、『名大』に掲載された学生や教員が執筆した記事を検討することで、この時期の学生や教員の意識の一端を明らかにした。学生たちは『名大』に情報交流の役割を期待し、また論評や編集のさらなる「自由」を求め

て「新聞」への拡充を模索していた。課外活動を支える「運動部」のあり方をめぐっても熱心な議論を繰り広げていた。教員は学生に対してたんに知識や技術のみを修得するのではなく、文学や芸術に触れることを通して「徳」を身につけた医師になることを求めていた。学生や教員の視線は学内に向けられていたようにみえる。

他方で、この時期「満州事変」から日中全面戦争へと社会が大きく転換しつつあった。じつは『名大』にはそうした社会状況への学生の意識をうかがうことにできる記事もいくつかみられる。しかし、今回は学生たちがそうした社会状況をどのようにみていたのか、ということは明らかにできていない。また、杉田直樹以外にも何人かの教員や配属将校が記事を寄せていた。彼らがどのような学生観や教育観をもっていたのかということについても触れることができなかつた。さらに、『名大』での議論に表出した名古屋医科大学の学生や教員の意識が当時の他大学の学生や教員のそれと比べてどのような特徴をもっていたのかということまでは十分に検討できなかつた。課題ばかりが残つたが、いづれ取り組むことができればと考えている。

繰り返し触れてきたように、『名大』は一九三五年四月の第二三号をもつて終刊となり、鶴天学友会の『鶴天学友会報』と合併して、一九三五年十月から『名大大学友会報』となつた。名古屋医科大学発足時の人事紛争を契機として「自治」への意識を高めるなかで刊行が始まつた『名大』は、二年三か月というごく短い期間ではあつたが、学生自身が編集と発行に携わつた貴重な試みとして高く評価できるのではないだろうか。

最後に触れておきたいのは、こうした『名大』の試みが成立した背景の一つにこの時期の学生の出自が関係していたのではないかということである。この時期の名古屋医科大学の学生は、愛知医科大学の予科を修了して本科(医学部)に進学してきたものたちだつた。一九三二年四月時点で愛知医科大学医学部に在学中だつた学生は五月に名古屋医科大学へと編入した。一九三二年度と一九三三年度には愛知医科大学の予科で三年間過ごした学生が進学し

てきた。一九三三年三月に予科が最後の卒業生を出して廃止され、一九三四年度以降は高等学校から入学者を受け入れるようになった。こうして予科出身者から高校出身者へと大学学部の学生が入れ替わるなかで学生の気質もかわり、『名大』はその役目を終えたようにもみえる。とはいえ、この点の詳細な検討も今後の課題となる。

なお、『名大』に掲載されたすべての記事（ただし広告は除く）の目次を次ページ以降にまとめた。ご参照いただければ幸いである。

（よしかわ・たくじ 名古屋大学教育発達科学研究科 はじめに・結びにかえて）

（あべ・たかや 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程学生 第一章）

（ふじい・としき 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程学生・

日本学術振興会特別研究員 第二章）

（つげ・むねき 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士前期課程学生 第三章）

（はやし・のぶこ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士後期課程学生 第四章）

## 『名大』掲載記事一覧

凡例

※広告は省いた。

※執筆者名はわかる範囲で記した。

※無題のものについてはわかる範囲で内容を（ ）内に記したものがあある（俳句）など。

※見出しに付された傍点や圏点は省いた。

※誤字であると推測されるものもそのままとした。

第一号 一九三三年一月十八日発行

・ 歩一歩 新實藤一

・ 基本金問題に就いて 竹澤

・ 学芸部について 学芸部委員 服部保

・ 聴診器 森

・ 共済部の事業大綱と現在の状態並に今後の方針に就いて 共済部

・ 共済部の被服係について 國枝

・ (短歌)

近藤博 佐宗武雄 さゞれいし 山口正

・ 学生の生計調査及び下宿就職、学資融通

- ・今日迄の沿革
- ・わが齢 山田潔
- ・共済部言
- ・学生大衆は「名大」を支持する
  - 一年 星野邦三 田中信吾 寛 X生 佐宗武雄 X、Y、Z Y生
  - T、Y生 横山生 矢崎芳晴 I、I生 中西眞吉
- ・運動部について 運動部委員
- ・柔道部報 服部保
- ・(無題) 中西眞吉
- ・スキー研究(一) 片山信
- ・スポーツの本質に立ちて T生
- ・学生ホールに就いて
- ・盧杯戦中野君優勝す
- ・能楽に浸る心 名大宝生流謡曲会 Y
- ・医科大学の憂鬱 竹澤
- ・映画市場管見 寛光
- ・夢を追つて 山口正
- ・編輯室から 竹澤
- ・名古屋医科大学俳句会に就て 堀田禪
- ・記念祭見たまゝの記 森
- ・新しい生命に 藤田生

・名古屋生物学会を聞く 竹澤

第二号 一九三三年二月二十三日発行

・学生会の動向

・就職座談会を期待せよ

・新医学士予餞送別会が開かれる

・聴診器

・欧米めぐり 岡田教授談

・鶴天学友会よ新聞を発行せよ

・小口教授 国際眼科学会へ御出席

・学芸部事業雑感 服部保

・ホール雑談

・打診と聴診 鋼

・編輯室から

・運動部はそして運動部を!! 主として委員の立場に立つて 住田英信

・大岩市長杯争奪第二回東海実業団对学生団対抗戦に本学より左の者推薦せられ出場せり。

・第二回盧氏カツプ争奪戦

・小観 中西眞吉

・スキー研究(二) 片山信

・二年級便り 俊

・会計部より

- ・名医大句会二月例会抄 於石田元季先生宅
  - ・赤倉菅平寸奇異日記 吉田仁太郎
  - ・ヨット 永見律
  - ・共済部第二学期事業成績報告
  - ・共済部役員会
  - ・古本売買幹旋開始
  - ・新品販売
  - ・売店移転
  - ・革新短歌私見(二) 山田潔
  - ・名古屋生物学会 ムラカミ氏廣
  - ・還元論是非―子供礼讃―
  - ・映画愚筆 たかむら
  - ・三年級物語(二) 三黒須孝夫
  - ・『忠臣蔵』覚へ書 凡生
  - ・制服の処女 K
  - ・〔俳句〕
- 第三号 一九三三年八月十七日発行
- ・さらば若き学士よ！ 朗らかに巣立て
  - ・温室から社会へ
  - ・図書館への希望

- ・アゲユー                    四年毛受英次
  - ・聴診器
  - ・革新短歌私見(二)            山田潔
  - ・梅                    渡邊俊郎
  - ・三年級物語(二)
  - ・レコードが廻る            服部保
  - ・コメデ、ナゴヤ    第二回公演評            光
  - ・赤倉、菅平スキー日記    吉田仁太郎
  - ・病理学教室エスベラントに就いて    業績を發表
  - ・句稿抄
  - ・自動車を皆のものに
  - ・就職談                    E A 生
  - ・おべらの夕                高村
  - ・映画批評 「忠臣蔵」に就て            映画研究会
  - ・泣き笑                    X Y Z 生
  - ・〔短歌〕                    山口正
  - ・生活をうたふ                山田潔
  - ・流動資金返却
  - ・早春の熊野                山川幸男
  - ・R 倶楽部と性的標準            K T 生
  - ・蛙の目
- 矢崎

・編輯室から

第四号 一九三三年五月二十日発行

・水母になる勿れ

・予科生活を顧る 永坂三夫

・偶感 織田三郎

・聴診器

・一年生の諸兄に 学芸部

・理事会役員会報告

・昭和八年三月卒業学生氏名表 名古屋医科大学

・第一回学生希望調査

・満鮮旅行計画 織田大佐

・「浦の花」発刊 服部

・お願ひ 学芸部委員

・第三回盧杯戦 中村君優勝

・恒例アサヒビレーヤホールにて盛大なる新入生歓迎会挙行さる

・編輯室から 板津

・随句随筆―埋もれた芸術―

・外道を歩む映画 ファン初春の思出 健坊

・文 竹澤俊

・詩形愚考 岸澄三

・革新短歌私見 山田潔

第五号 一九三三年六月十五日発行

・自治の旗下に N生

・自治高唱号に寄す 山瀬不破彦

・聴診器 M生

・偶感一束 SO生

・庶務部報

・鶴天学友会昭和八年度可決予算報告

・学芸部

・管絃楽部 K生

・巡廻講演会参加者氏名 学芸部

・會計だより 齊藤

・名医大子供会生る

・共済部

・昭和七年度事業成績

・運動部

・見たまゝ感じたまゝ 運動部委員

・山岳部

・山岳部昭和八年度夏期計画

・むさゝび 猪飼緋来

- ・岩屋観音にて 佐宗武雄
- ・馬術競技の話 齊藤
- ・ヨット倶楽部ニース 名医大ヨット倶楽部
- ・庭球部 Y生
- ・先輩栗本一等軍医の悲壮な戦死をしのぶ 成田軍医正の講演
- ・東海大学部専リーグ戦
- ・中部日本大学高専卓球選手権大会
- ・此頃の馬術 齋藤健二
- ・三年だより
- ・学生ホール電話使用規定
- ・昭和八年度名古屋医科大学鶴天学友会本部役員（「名大」編輯室調）
- ・実弾射撃行さる
- ・編輯室から 板津
- ・名大教室紹介欄
- ・勝沼内科医局より 一医局員
- ・解剖学教室より E生
- ・蒲の花出版記念句会
- ・名大讃歌 編輯同人
- ・運動部関係団体
- ・学芸部関係団体
- ・卵巣ホルモンの構造如何 安達英達

・五月のメランコリア―上半期洋画決算報告―

・夏二題

・陽炎 猪飼秀夫

・蠅 中根俊介

・昭和七年度徴兵検査に現はれたる壮丁の趨向

・信州病院行脚記

・信濃に杖引いて(二) 佐々木重夫

・初夏隨筆 K T生

第六号 一九三三年七月五日発行

・銷夏戦法

・偶感 S O生

・百万円貰つたら! K S生

・聴診器

・学生生活の時期 杉田直樹

・庶務部 会計部

・お願ひとお知らせ 住田

・恩師小口教授無事帰学さる

・学芸部

・ Cinema Japonica 篠宮信

・名大美術研究会創設 T生

織田大佐

- ・名大句会六月例会句抄
- ・岐阜県地方巡回講演 陣容成る!!
- ・名大学生洋学聯盟に就て 宇野甫
- ・日本語。漢字。ローマ字 永坂三夫
- ・洋画を見る人のために M氏
- ・夏休みも近づく K A生
- ・本学柔道部主催全国中等学校柔道大会開催さる
- ・剣道部
- ・馬の駆歩と手前 齋藤健二
- ・学内野球大会優勝戦の記 運動部委員
- ・馬術講演と映画の夕 長橋一雄
- ・名大夏期臨海宿舍設けらる!
- ・東海学生卓球リーグ戦始まる
- ・八事原頭より 河島生
- ・同志社大学との対抗ヨットレース 竹澤俊
- ・伊勢湾頭長蛇を逸す
- ・名大教室紹介欄
- ・桐原外科便り 桐原外科K生
- ・医化学教室便り
- ・レコードコンサートに関して 岡田博
- ・編輯室より 板津

服部保

・名古屋城に就て 織田大佐

・革新短歌私見を結ぶ

・信州病院行脚記

・信濃に杖引いて(二) 佐々木重夫

・黒茶碗 K・K・K生

第七号 一九三三年九月三十日発行

・再び「名大」の使命に就て

・使命の秋

・鶴天学友会基本金を納めよ!!

・各種団体宛の郵便物は学生ホール事務室に

・希望調査のその後に就て 庶務

・聴診器

・外遊便り 萩野鋤太郎

・学内ニュース

・尊敬すべき教授会の大英断!

・齊藤教授帰朝さる

・古西少佐栄転

・仲野元主事上海赴任

・天竺講師洋行さる

・「夏休みを語る座談会」開かる

- ・ 自動車運転手試験に伊藤、後藤両君見事パス
- ・ 学友死亡者
- ・ 名大教室紹介欄
- ・ 巨人岡田内科
- ・ 病理教室
- ・ 見よ!! 暖き学友の声  
名古屋医科大学学生部会
- ・ 昭和八年度夏期休暇見学表
- ・ 学生会部報
- ・ 庶務部
- ・ 会計部
- ・ 共済部
- ・ 第一学期事業報告
- ・ 会報部
- ・ 運動部
- ・ 野間夏期臨海衛生相談所に於る新患者の各科別一覧表  
伊藤博
- ・ 富士の裾野に遊ぶ  
齋藤健二
- ・ 学芸部
- ・ 岐阜県地方巡廻講演大成功をおさむ
- ・ エスぺラント講座(1)  
福慶逸郎
- ・ 満洲国を衛生上より見る  
満洲産業建設学徒研究団員 服部保
- ・ 大町印象  
佐野武四

・医学者と機智 木村英夫

・能代追想記 山川幸男

・平鹿医療組合見学記 朝比奈

・五城目組合の場合 竹澤徳俊

・短歌 山田潔

・編輯だより 矢崎

第八号 一九三三年十月二十五日発行

・日本主義と国際主義 河本禎助

・一つの希望

・聴診器

・欧米視察談 齋藤教授述

・学内ニュース

・日曜祭日の講堂使用許可さる

・教授学生懇談会学生課主催で開かる

・名大精神のよき象徴!! 遠大なる抱負のもとに吾が学生部会に於いて討究されつゝあるマーク問題

・秋季大演奏会開催

・学生会主催「茸狩」来る十一月一日犬山方面にて

・名大の歌 歌詞募集近づく 三百学生の朗に高唱し得る

・精神科教室の落成

- ・図書館長後任に福田教授
- ・岡島少佐着任
- ・「野間を語るの会」開かる 桐原、長松両教授を迎へ
- ・「母の講座」 文部省並本学の共同主催
- ・名医大美術研究会学内展覧会開かる
- ・「をさなごを語る会」開かる
- ・偶感 織田三郎
- ・学生会部報
- ・庶務部
- ・運動部
- ・体育デーのプラン
- ・庭球部 山本
- ・卓球部
- ・運動部より S、O生
- ・琵琶湖週航 SM生
- ・名大教室紹介欄
- ・整形外科だより 伊佐治
- ・城東病院見学記 黒川不二男
- ・新秋豪華版「夏休みを語る座談会」 学生会主催のもとに九月廿二日午後四時より 学生ホールにて開かる
- ・伊那風景 奥谷信三
- ・◎台湾に遊んで O生

・俳句会九月例会句抄

・聚楽園に遊ぶ S・Y

・スポーツと体操 片山信

・〔詩〕

・診療室 寛光

・読書 山口正

・秋 森泰樹

・一輪ざし 岸澄三

・名古屋祭所見 猪飼緋來

・編輯だより 竹中

第九号 一九三三年十一月二十五日発行

・国民精神作興ニ関スル詔書

・委員改選期を控えて 学生会一年間の業績を思ふ

・名大の位置の自覚 中西真吉

・聴診器

・偶感 織田三郎

・迷題惑語

・学内ニュース

・国民精神作興 大詔渙発十周年記念式 十一月十日講堂にて挙行さる

・齋藤教授帰朝歓迎座談会開かる

- ・名倉教授の洋行決定さる
- ・萩野講師帰朝さる
- ・Die Woche アサヒグラフ アサヒスポーツ 学生ホールに備へ付らる
- ・医局対抗野球戦本シーズンを終る
- ・軍事教練査閲
- ・会報部主催「論文、創作懸賞募集」準備着々と進みつゝあり
- ・解剖祭盛大に行はる
- ・秋季実弾射撃終る
- ・名古屋学生洋楽聯盟演奏会
- ・本学「山の家」木曾福島に落成
- ・着々充実されつつ有る学内設備
- ・第十一期生の刑務所見学
- ・三年級の市内衛生施設見学初る
- ・茸狩風景 イブシロン
- ・休学して故山に病む人々
- ・学生会部報
- ・庶務部
- ・運動部
- ・学内軟式野球大会
- ・学内軟式庭球選手権大会
- ・学内籠球大会 啓生

・体育デー スケヂュール

・学内剣道大会

・学内柔道大会

・剣道部近況

・柔道部報

・馬術部報 大原

・名大教室紹介欄

・齋藤外科教室

・神経精神病学教室 堀要

・日本語漢字ローマ字 Nagasaka-Mituo

・名大魂は呼応する!! 鶴天学友会東京支部より激励の辞寄せらる

・登高記(木曾駒) S M生

・学生の気持 中西生

・歩いてきた道 K・K・K・生

・ある学生の歌へる 眞琴

・ミクロスコープ

・兼好法師の女性観 S生

・紅茶の誘惑 渡邊俊郎

・詩 竹澤俊

・能楽漫談 O生

・名大句会十月例会句抄

会報部

・麻雀雜考 今野義雄

・編輯だより 竹中

第一〇号 一九三三年十二月二十日発行

・新委員への期待大なり 学生会今後の発展に対して

・力強く躍進する名大学園 T S 生

・聴診器

・千葉医大へ御栄転さるゝ吾等が林亥之助教授を送る

・転任に際して 林亥之助

・教授スキー漫片 葭田威痴樓

・学術座談会開催要旨

・迷題惑語

・学内ニュース

・学生会総則並細則草案審議さる

・田村学生会長の新旧学生会委員 招待会催さる

・林教授後任として三輪誠博士来任さる

・助手団代表学生会代表と会見

・伸び行く名大圏 安井講師等静岡へ赴任するの予定

・本年度教練査閲好評裡に終る

・鶴天学友会東京支部通信十一月号送付さる

・講演会予告 学芸部

- ・第三学年の衛成病院見学
- ・「光芒」発刊 名医大から生れた詩集!
- ・訃報
- ・「エスペラント」読者之会発表さる
- ・謹悼故荒川満君
- ・学生会一年の回顧
  - 理事長 新實藤一 会計部長 住田英信 共済部長 栗林安夫
  - 学芸部長 服部保 会報部長 山川幸男 運動部長 伊東博
- ・庶務部 山口
- ・学芸部
- ・学芸部委員としての感じ 山瀬不破彦
- ・感謝 服部保
- ・第四学年役員を送る
- ・運動部
- ・第六回中部日本高専柔道大会
- ・勝沼教授推戴会
- ・ホッケー部の近状回顧
- ・山岳部報
- ・山岳部冬期計画
- ・スキー倶楽部から 威痴樓生
- ・庭球ファンへの大福音 庭球コート修理完成す

・名大教室紹介欄

・生理学教室より 中路

・産科婦人科教室

・エスペラント講座(2) 名大エスペラント会

・「アルトハイデルベルヒ」 眼科学教室 萩野柳太郎

・晩秋の歩み ヘルマン・ヘッセ 片山信訳

・シネマ・スーヴニール 篠宮信

・名古屋学生俳句聯盟秋季大会

・入鹿池吟行記 小林

・雲仙山行 S M生

・解剖試験 伊吹四郎

・(詩) 佐宗武雄

・編輯だより 牧田

第一号 一九三四年二月一日発行

・希望に輝く昭和九年を迎ふ さらば力強く使命の第一歩へ

・地を踏しめて曙に対す 理事長 中西真吉

・断片想

・職員学生其他受療内規改正

・迷題惑語

・34年各部の抱負

- ・学芸部
- ・運動部
- ・共済部
- ・会報部
- ・庶務部
- ・冬の有馬 静史
- ・学内ニュース
  - ・今年度第一回役員会を開く 新委員による各部の横顔
  - ・本年度卒業生の送別会プラン成る 理事会にて決定
  - ・予想さるゝ入学難 全国高等学校からの学生募集
  - ・遂に吾等の手にも鶴天学友会々々報配布か 三矢部長等の御尽力で実現されん
  - ・新年度予算会議を控へ学生会各統制団体の調査始る
  - ・着々充実しつゝある薬理学教室 主任三輪教授を迎へて活気満々
  - ・医療の社会化 実現に向はんとす
  - ・岡島少佐歩兵第六聯隊副官に榮転さる 後任は八高の川原少佐
  - ・籠球コート新設さる 同好者の喜びや多大
  - ・山岳部主催 冬の山座談会 楽しき一夜の山の集ひ
  - ・学友会員名簿出来る 鶴天学友会庶務部で編輯
  - ・共済部売店第二学期事業報告一覧 共済部委員
  - ・学生希望調査表（昭和八年十二月調）
- ・名大教室紹介欄

・皮膚泌尿科教室

・小児科教室

・「アルトハイデルベルヒ」(続) 眼科学教室 萩野柳太郎

・映画毒語独語 四宮信忠

・学生日記

・山岳部計画

・参考書百態 安達英逸

・スキー倶楽部報 葭田一老生

・寝台車の上 伊吹四郎

・サイレン M生

・十六世紀以前の楽器と十二平均音率階 宇野甫

・乗鞍スキー行 S M生

・十二月例会句抄

・編輯室より 小石

第一二号 一九三四年三月一日発行

・新医学士諸氏を送る 母校名大の名譽に賭けて諸兄の活躍を期す

・卒業生諸兄に贈る 理事長 中西眞吉

・巣立たんとして思ふことども 前理事長 新美藤一

・断片想

・卒業生諸君を送る 学長 田村春吉

- ・卒業生諸君に送る 鶴天学友会副会長 葛谷貞二
- ・卒業生諸君への待望!! 助手団
- ・師言 大庭士郎 勝沼精蔵 小口忠太 岡田清三郎 河本楨助 齋藤眞 三輪誠 桐原眞一 木村哲二 長松英一 名倉重雄
- 吉川伸 阿久根睦 小宮喬介 福田邦三 戸苅近太郎 横湯温良 須川義弘 織田三郎
- ・部告 会報部
- ・迷題惑語
- ・卒業感想録 四年 山川幸男 四年 秋山勲 四年 M、Y、生 四年 服部保
- ・名大よ何を聴いたか 現代医への一テーマ 医療組合の権威加藤博士招聘 熱心に検討する振興名大学徒
- ・学生連署の懇願書 東大入を伝へらるる勝沼齋藤両教授への切々なる留任運動
- ・下之一色漁業組合共愛病院 一二月の行事
- ・会報部主催 名古屋新聞社見学 職務柄つきこんだ技術的質問をはなつた会報部委員連
- ・女学校新卒業生歓迎講演会 友の会主催にて医大に聞く
- ・伯国 サンパウロ医科大学日本見学団 一行来学せり
- ・今や注視の的会報「名大」前途益々遙けし 某医大内には新聞の作成運動起りつゝあり
- ・全国より集る志願者百十三名 最後の栄冠を掴むは誰々!!
- ・名倉教授並勝沼講師の海外出張 愈々三月五日名駅御出発
- ・四年生送別会は学芸部からとばかり 珍趣興こらした余興プログラム思はるゝ其の日の盛況
- ・学生への福音 顕微鏡八十台備付 四月より使用
- ・学芸部主催 小型映画を楽む会 好評を博した教授諸公の名カメラマン振り
- ・卒業を控えて 第十二学期行事
- ・部報

- ・スキー倶楽部報 葭田
  - ・籠球部部報 K生
  - ・自身の Rhinoscopia posterior と眼底検査 生理学教室 松岡脩吉
  - ・落書帖 Y、D、生
  - ・映画狂日誌 篠島信
  - ・白と黒は並ぶ ホール住人
  - ・試写評
  - ・Neo-vitaminism(A) 安達英逸
  - ・日本医学の回顧と医学将来の問題(一)
  - ・竹内芳衛先生を思ふ 齊藤進
  - ・新医学士を送るに臨みて 二年 近藤信夫
  - ・名大句会一月例会句抄
  - ・サイレン 野党の声
  - ・台湾紀行 老耷正美
  - ・学生日記
  - ・編集室は囁く 渡辺生 O K E 生
- 第一三号 一九三四年四月九日発行
- ・歓迎の言葉 名大学生の意気に力強く生きよ 自治を語る学生部会を通して
  - ・新入学の諸士を迎えて 中西眞吉
  - ・断片想

- ・新入学諸君に与ふ 学生課長 大庭士郎
- ・一年生諸君を迎ふ 河本禎助
- ・新入学生諸君 学生主事 横湯温良
- ・迷題惑語
- ・部告 会報部
- ・空の護り 大学高専号献納 名大も欣然参加
- ・大垣新興毛織にて衛生講演を行ふ
- ・盛大なりし卒業生送別会 三月七日 市公会堂にて
- ・学生会の音頭取りで華やかな記念祭開催 今秋十月頃の予定で計劃
- ・春の喜び医局から 細菌教室便り
- ・法医学教室
- ・日満中の親善 陽春日本への先駆 満中国学生見学団来る 大成教授引率の下に三月卅日来名 名大病院及び名古屋城見学
- ・吾が解剖学の恩人奈良坂先生逝く 三月廿二日大光院にて告別式
- ・昭和八年度卒業式挙行 三月廿日本学講堂にて次いで万平ホテルにて謝恩会
- ・春の旅の嬉しいニュース
- ・入試難関を突破して全国高等学校より扱ばれし八十名 輝かしき新興名大生としての第一歩
- ・托鉢奉仕の生活者 西田天香氏の講演 多大の感銘を聴集者に与ふ
- ・時の問題 医療組合運動に関する座談会 今度は広瀬氏を中心に開かる 助手団主催のもとに有意義に終る
- ・昭和九年四月入学許可者氏名表 名古屋医科大学
- ・学生会活躍の鍵 談論風発活気を呈した学生会新年度予算会議 貧弱な資源割当に結局各部の互譲で決定
- ・来る四月二十八日新入学生歓迎会開催 期待される余興のプログラム

- ・ 伝統を誇る 運動部第二部の将来性！ 本年度予算割当を中心に理事会と運動部代表の懇談
- ・ 卒業後どこへ落付いたか？ 新医学士諸兄の動静 今後の活躍こそ大いなる見もの
- ・ 昭和九年三月二十日第三回卒業学生氏名表 名古屋医科大学
- ・ 本格的活動期に入らんとする学生会各部より
- ・ 学芸部とは（新入生諸君の為に）
- ・ 新入生諸君は総て何れかの部へ
- ・ 新しい友達に叫ぶ 運動部部長半田
- ・ はつきりした認識を!!（名大運動部の特種性）
- ・ 晴れの入学を喜び会報部は諸君の新らしき抱負を待つ
- ・ 新入生の諸君を迎へ 共済部 喜多川武敏
- ・ *Ennui d'operation* 竹澤俊
- ・ 共済部 竹内
- ・ 趣味欄
- ・ 時代の一大飛躍 小学生が―大学生を試問する 子供達はこんな疑問を抱いて居ます
- ・ 春は先づ「さくら音頭」でピクニック
- ・ 贈る花束 長松英一
- ・ 我がヒットラー観 ア、ハーン
- ・ 学生記者探訪 無抵抗主義の易者語る 筵竹を撫しつつ
- ・ ミュールレンスの観た日本 毛利孝一
- ・ 四月の俳句
- ・ ピアノを弾く人々に

- ・日本医学の回顧と医学将来の問題(二)
- ・新らしき学友を迎へて 山口正
- ・学生日記
- ・サイレン
- ・躍進する名屋古学生映画聯盟
- ・Neo-vianism (B) 安達英逸
- ・名大句会例会 三月句抄
- ・心腹の友たらん 二年理事 田口茂夫
- ・編集室は嘯く

第一四号 一九三四年五月十五日発行

- ・所謂懸賞論文募集を通して 名大学生層の批判
- ・大学の使命と母校愛 田口茂夫
- ・断片想
- ・本学 創立記念日に関する一私見 二年理事 岡田博
- ・若葉薫る五月 記念せよ新興名大創立の日 式典厳かに挙行さる
- ・式辞 名古屋医科大学教授 田村春吉
- ・迷題惑語
- ・我がヒットラー観(承前) 所謂ヒットラーをしてヒットラーたらしめたか ア・ハーン
- ・病院風景 覧ひかる
- ・各地大学より 東京帝大 京都医大 満洲医大 慈恵医大 東北帝大

- ・力強きレゲネラチオンへの歩み 名大助手団大会開かる 教授団学生委員出席し協力前途への躍進を期す
- ・名大の四精鋭更に桐生へ 桐生組合病院こゝに復活
- ・笑ひと皮肉を混じて 盛大なりし新入生歓迎会
- ・衛生学講師新任
- ・配属教官異動
- ・名大最初の壮挙 全学を挙げて記念日祝賀会準備進む 理事側準備委員と一年各高校出身代表の懇談
- ・鶴天学友会評議員会開かる 学生会理事四名出席
- ・ローマ字会会員 五月の新緑をたづねて中山七里へ
- ・満州医大見学団 感謝の辞を寄す
- ・勝沼内科天笠講師五月六日に帰朝 欧米医学視察から
- ・「名大学生の歌」を募る 学芸部
- ・学生会
- ・躍進の象徴!! 学長の揮毫に輝く名大題字 恰もよし本学創立記念の佳日を下し学長室において厳肅にしたためらる
- ・躍進する下之一色共愛病院
- ・新部長を迎へて 学芸部の充実 山積する新プラン
- ・共済部から T・S
- ・着任挨拶 配属将校 星大佐 前配属将校 川原少佐
- ・名大スポーツ界
- ・五月の空に長棍唸り 若人の血は踊る 聯盟野球戦最高潮
- ・復興の意気物凄く 優勝目指すホッケー部 刮目して期待あれ
- ・惜しくも準々決勝に敗る 籠球部

・大海原に呼吸して選手権制覇に進む 名大ヨット倶楽部

・庭球部

・運動部は諸君に希望す

・贈る花束 長松英一

・若さをもとと叫ぶ 精神病理学教室より

・変現自在の日本語 テニスガペニスにかはる世の中です

・医学片鱗 MO生

・初めて大学生となつて 一年MI生

・糖構造漫談 安達英逸

・学生会再検討(主として運動部組織に就いて) 八木忠雄

・作品抄 棕欄短歌会

・サイレン

・神霊術実験を見て 江馬良夫

・学生日記

・編集室より 山口

第一五号 一九三四年六月十五日

・ピクニックに孕む 学生会の意図

・所感 齋藤健二

・断片想

・偶感 山田和麻呂

- ・夢を見る頃 森義明
- ・迷題惑語
- ・評論 記念再吟味
- ・医局漫筆 外科一年生漫筆
- ・勝沼内科
- ・トビック街
- ・各地下大学より 工業大学 東北帝大 慈恵医大 京都府立医大 立正大学
- ・非常時に偲ぶ 海軍記念日 熊野海軍大佐の講演と北村講師の家玉展覧
- ・思ひ出の涙新たに 東郷元帥敬弔式 本学講堂に於てしめやかに挙行
- ・名港の偉観 軍艦伊勢来る 教授学生便乗して津に向ふ
- ・満洲国に新天地を求め 伸び行く名大医療線 森氏ハルビン病院長に赴任
- ・聞信会五月例会 多田師御来講
- ・三四年生六拾名 飛行第二聯隊見学 各務ヶ原の空青し
- ・国語国字問題の解決策 医学術語の言葉直ほしの試み完成
- ・「名大学生の歌」を募る 学芸部
- ・名大快勝す 第九回対京都帝大春期ホツケー定期戦
- ・庭球部
- ・学芸部
- ・共済部
- ・庶務部
- ・昭和八年度学生会支出決算

- ・名大卓球部の覇業遂に成る 中部日本高専卓球大会に優勝 坪井
- ・本学主催第二回全国中等学校柔道大会
- ・野球部
- ・剣道部
- ・第二回同志社大学対名医大 ヨットレース定期戦 六月三日雨の名港に行はる
- ・千葉医科大学と籠球定期戦開くか―部員の希望も成果近し
- ・コドモ会の大活躍
- ・我がヒットラー観(承前) ア・ハーン
- ・むなしく 山本仁
- ・自殺考 Y・E
- ・贈る花束 長松英一
- ・五月作品抄―棕櫚短歌会―
- ・学生会再検討(2)主として運動部組織について 八木忠雄
- ・故き友に捧ぐ 一年SM生
- ・名大俳句会五月例会句抄
- ・サイレン
- ・「名大学生層批判」を駁す 竹澤徳俊
- ・科学を我等に!! S・O・S
- ・学生日記
- ・編集室より

第一六号 一九三四年七月一日発行

・自由の天地 夏期休暇を迎ふ 抱負や如何に!!

・運動部組織に就いて 半田宗一

・断片想

・偶感漫談 大島福造

・迷題惑語

・評論 医療組合見学

・医学と医業 北村一郎

・医局漫筆 産婦人科

・トビック街

・各地大学便り 東京帝大 北海道帝大 岡山医大 大阪帝大

・映画講演による衛生思想普及を目指して 巡回講演開催さる 教授学生の参加を得て 期待さるゝ当日のプログラム

・名大「山の家」は待つ 行け!夏の木曾峡谷へ

・子供を語る会 コドモ会の主催で 本学講堂に開かる

・記念祭気分濃厚 大学年中行事への準備工作か? 助手団学生部会代表者会合 去る十一日学生ホールにて

・病菌伝染を取除く 白衣架けの整理 病院食堂廊下に

・着々成果を取めある 教授学生懇談会 日頃の固苦しさはどここへやら 多角的な話題に終始す

・名大宝生流謡曲大会

・理事長勇躍満洲へ 先輩訪問を兼ねて医療視察に

・学芸部主催 科学と宗教講演会 工学博士佐藤定吉氏 熱意ある雄弁をふるふ

・六月二十六・七・八の三日間 名大美研会第二回校内展 新館二階学生控室に開かる

- ・陸軍委託学生採用に 最初の学科試験行はる 受験者突然の事で吃驚
- ・一年新理事を迎へて最初の理事会 八木君の「学生会運動部再検討」花が咲く
- ・夏期病院見学
- ・先輩訪問を巡回講演（演説）と共に
- ・庶務部は最近
- ・名大俳句集「蒲の花」第二巻 近く刊行の筈
- ・夏は水 七本松プール解放さる 入場券は運動部に
- ・三年生優勝 学内野球大会終了す
- ・四年庶務会計部委員の休暇事業計画抄る―夏期見学病院紹介―
- ・県社会課の人を迎へて 児童虐待防止法案について語る 子供会会員の研究的努力に驚く
- ・初夏の蒲郡へピクニック 参加者少数で部会の努力も失敗 学生今後の考慮を要す
- ・杉田教授を囲んで
- ・部告 会報部
- ・山のシーズン来る 峰の招きに応ずる 名大山岳部の計画
- ・結成を前にして琵琶湖遠漕 生れんとする端艇倶楽部
- ・八事原頭に俄然旋風 炎熱に展開されんとする一大珍野球戦 学生優勝軍に教授チーム挑戦 田村学長応援団長となり勝沼主将の鼻息意気荒し
- ・断然優勢な二年 校内大会の庭、卓、籠球の覇権を握る
- ・馬術部
- ・レントゲン教授とレントゲン線の発見① 出射榮
- ・贈る花束 長松英一

・俳句会六月例会句抄

・石 足助純

・統卵巢ホルモン構造論 安達英逸

・訃報

・級友大野十郎兄を偲ぶ 梶塚正敬

・尾瀬と大島 紺野義重

・六月作品抄―棕櫚短歌会―

・サイレン

・学生会再検討を読みみて 運動部組織に就いての所感 河島勇

・映画 巨人ジョーンズ 篠島信

・学生日記

・編輯室より

第一七号 一九三四年十月十五日発行

・体育デーを期し秋の催し計画さる 成果や如何に

・名古屋医科大学の進む可き道 岡田博

・断片想

・感語子に寄せる 福田邦三

・理事会現在の動向 理事 星野邦三

・迷題感語

・評論 名大と社会

- ・トビツク街
- ・桐原教授と釣りの味
- ・各地大学より 東北帝大 東京帝大 九州帝大 北海道帝大 東京工大 東京商大
- ・通俗医学の普及に 興奮の渦紋を投じて 想外の効を収めて巡回講演終る
- ・故奈良坂源一郎先生胸像となつて再び解剖学教室へ
- ・唯一の慰安所 学生ホールに書棚設置 福田教授等よりの寄贈にて 宛然小図書室の觀
- ・名古屋医大千葉医大 両籠球部の交歓定期戦 第一戦は千葉の勝利へ
- ・剣道部主催 全国高専大会開催 十一月十一日 本学道場にて
- ・野球聯盟戦に本学決勝に臨む
- ・学友会々報 学生の投稿を求む
- ・徹底せしめんと部会の理解を 一年生と理事会の懇談会 九月廿七日より数次に亘つて
- ・多彩の秋 部会が贈る豪華版「秋の催し」の案成る 九月廿七日より数次に亘つて
- ・昭和九年度東海学生庭球選手権大会 庭球部委員記
- ・庶務部
- ・医療組合問題に花咲き「夏休みを語る座談会」深き感銘を与ふ
- ・吾がヒットラー観(承前) ア・ハーン
- ・九州の記憶 伊藤明
- ・能代本院外科患者の数学的觀察 湯本薫夫
- ・端艇部合宿記
- ・レントゲン教授とレントゲン線の発見② 出射榮
- ・卵のたわこと 松田美實

- ・信濃大町 葭田威痴朗
- ・医療組合に生活して T生
- ・東日本医療界巡り 大菅三郎
- ・系統樹 佐原武雄
- ・訃報
- ・満洲漫遊記 水野箕吉
- ・サイレン 運動部よ眠いのか? A T生
- ・解剖学課外 N I M
- ・親子 伊吹四郎
- ・学生日記
- ・編集室より

第一八号 一九三四年十一月一日発行

- ・錦繡の秋名大学園の誉れ 待望の大学祭来る 八事ヶ丘に将又鶴舞原頭に展開さるゝ師弟懇親の一大図絵
- ・下之一色漁業組合 共愛病院使役
- ・学友、学生合同の大懇親会開かる 鶴天学友会主催 三日市公会堂にて
- ・学生部会 委員改選期迫る 期待さるゝ新メンバー
- ・尊き死者の霊を慰む解剖祭 覚王山日暹寺にて
- ・医大子供会 子供グループを結成す懇親を兼ねてもほりへ
- ・断片想
- ・医局生活への関心 卒業を控へ四年学生 医局長に物を聞く会 究学心更に湧然と医学専攻への躍進

- ・ 播籃期を脱した学生自治の部会が真価を問ふ大学祭
- ・ 迷題惑語
- ・ 評論 治療観への卑見
- ・ 医局だより
- ・ 耳鼻科
- ・ 小児科
- ・ トピック街
- ・ 各地大学便り 京都帝大 慈恵医大 北海道帝大 立正大学 京都府立医大 東京商大
- ・ 斯界に誇る三教授の獅子吼 現代医学第講演会 学術映画供覧に 聴衆溢ふれん 本学講堂
- ・ 柔剣道対級大会 六日午後本学道場に開かる
- ・ 三年優勝チームに挑戦する 各学年チームの秘策は 興味湧く対級野球戦
- ・ 学内籠球大会は来月六日挙行 断然強い二年チーム
- ・ 医局オンパレードにて 展覧される名大の世界的アルバム デビューする医学の秘庫
- ・ 大学の夕 奏でらるゝ名曲のリズム 銀幕に踊る名画に諸氏よ懇はれよ
- ・ 珍趣興の競技に感激と爆笑のシンフォニー 学生運動大会八事原頭に展開さる
- ・ 東海大学高専リーグの秋到る 必勝を期する我が籠球部
- ・ 一ヶ月間に亘る「母の講座」盛会を極む 各權威を擁して無事終了
- ・ 解剖教室の祖 奈良坂先生の胸像除幕式挙行
- ・ 白衣の天使より清交会会報発刊さる
- ・ 学内選手権は何処へ？ 軟式庭球対抗戦の興奮!! 前回の覇者二年組を廻つて 期待される激戦
- ・ 覇権は何れに？ 形勢混頓として予想を許さぬ学内卓球大会

- ・ヒットラーの Arbeitsweise (1)      ア・ハーン
- ・棕櫚短歌会作品抄
- ・満洲に於ける日本人医家活動の余地に就ての瞥見      中西眞吉
- ・レントゲン授教とレントゲン線の発見③      出射榮
- ・名大俳句会九月例会句抄
- ・東北医学部より組合病院への手紙
- ・サイレン
- ・訃報      T・M
- ・能代日記抄      小林繁
- ・学生日記
- ・今日のこの頃      足助純
- ・編輯室より

第一九号 一九三四年十二月五日発行

- ・大学祭批判会 主催は大学当局へ 毀誉相半ばし将来の省察を期す
- ・故奈良坂源二郎先生の胸像除幕式 十一月三日本学講堂に於て盛大に行はる
- ・予想外の好評裏に 医学標本展覧会終る
- ・大学祭の最後を飾る 音楽と映画の夕 聴衆市公会堂を埋め 学内学外交情の実成る
- ・解剖者遺族を迎へ 解剖慰霊祭 厳肅に行はる 秋風寒き十一月五日 覚王山日蓮寺に於て
- ・同好会結成を期し 学内写真展開かる 十二月六―八日 学生ホール音楽室に
- ・断片想

・意気旺んなり 鶴天学友会先輩学生合同大懇親会 十一月三日市公会堂に

・惜しくも再度の優勝を逸す

・戦ひの跡を顧みて

・柔道部報

・スキー倶楽部第三年の躍進

・迷題惑語

・評論 学徒の進むべき道

・日本語をはぐくむ 福田山の子

・各地大学便り 東京帝大 明治大学 京都帝大 九州帝大

・ヒットラーの Arbeitsweise (2) ア・ハーン

・片言 S生

・トピック街

・謹んで苦言を呈す 北岡正雄

・名大俳句会十一月例会句抄

・名大俳句会十月例会句抄

・学生の話 竹澤徳俊

・棕櫚抄

・常に結論は簡単な様で面倒くさい A T生

・過ぎしこと浮びしこと 伊吹四郎

・英雄 寛光

・サイレン

・ 偶語一束 大菅三郎

・ 学生日記

・ 編輯室より

第二〇号 一九三四年二月二十日発行

・ 明日への難関に処して 厳正なる人選要望さる 新年度部会委員の改選に全学生の焦点は向けらる

・ 長閑な改選風景

・ 新人の活躍を期す

・ 新役員総会開催

・ 昭和拾年度学生会役員一覽表

・ 芸術への眼覚め 学内写真展三日に亘る：同好会結成への第一歩

・ 授業料免除の暖い手に 救はれる苦学の人々 改則一部発表さる

・ 一九三四年展望 閑々生

・ 査閲

・ 招待

・ 小児科の坂本教授 十六日名駅着

・ 断片想

・ 茲に看る名医大の真精神 配属将校 星松尾

・ 狐書のはなし(上) 杉田生

・ アマチユアー画家として知られた 桐山氏送別の個人展開かる 桐生組合病院へ赴任 美術研究会より惜まれたつゝ

・ 大学祭決算報告会報部追加予算を廻つて 旧委員慰労会開かる

- ・博士論文通過氏名
- ・哲学倶楽部例会
- ・名古屋応用心理学会
- ・名大意識の貧困 序説 小港譲二
- ・試験魔来襲 空ッ風に乗つた 年の瀬の憂鬱さ!! 学生街聴診
- ・サイレン
- ・トピック街
- ・医事論評 国民健康保険に就いて 宮地忠雄
- ・本年度のノーベル医学賞 Nature 誌より安達生妙録す
- ・最近の話題 コレステリンを中心に
- ・下之一色漁業組合 共愛病院便り
- ・記念の催し
- ・松井、近藤両先生の歓送迎会
- ・名三会入営者氏名
- ・十二月学士試験日割
- ・編輯後記

第二一号 一九三五年一月二十五日発行

- ・新年度予算会を控へて 各部予算案編成を急ぐ 新らしい収入減をどう捌くか
- ・諸費節減し 淘汰さるべき余地あり 理事会の肚を聴く
- ・定例理事会 毎週木曜日と決定 統制ある歩み振り

- ・委員会には予め議案の表示
- ・各部署委員の日も決定されやう
- ・写真同好会 学芸部に所属 批評、研究の例会を開く
- ・書籍方面に向つて 流動資金の利用 下宿斡旋、日用品安価提供にも動く
- ・第一部の活用 第二部の支持に 運動部積極的に起つ 第二部への予算割当に一波乱を投ずるか
- ・母校の喜び 新進気鋭の教授 助教授より
- ・部会主催 坂本教授歓迎会
- ・新年度卒業生の入局、就職の予想は 各ファツハへ均等に配分
- ・共済部は何を為し 又為さんとするか 共済部使命実現の要素
- ・共済部存在の意義並会員のそれに対する再認識
- ・アメリカ、ヨハネスブルグよりの寄贈雑誌 The Leech 福田教授よりホールへ
- ・所感 助手団 芳人生
- ・本年度に於ける 学芸部新計画 教授中心の座談会 文化的水準の昂揚
- ・断片想
- ・部告
- ・学生気質の偏狭さを打破して学生課なる存在を深く認識すべきだ
- ・新築と復興に伸びる姿 但し阪大と熊本医大のこと
- ・名古屋の総合大学新設論
- ・台湾より厦門を経て 学長の齋したニュース
- ・興安嶺を越へ外蒙古へ 満洲医大の医事工作進む 極東平和への重大な役割
- ・思想とご指導理論―現代思想界滑走―

O K E 生

・運動部

- ・医大リーグ戦への 必勝に意気軒昂 東海リーグ戦は春秋二期に行ふ筈
- ・各種の競技大会 聯盟戦を控へて 馬術猛練習開始
- ・ホッケー部 本年度事業計画 興味は争奪戦か
- ・春季リーグ戦の征覇 医大庭球聯盟を結成し戸苺、岡田杯戦に参加せんとす
- ・白雪蹴つて 全国日本スキー選手権 東海予選行はる 本学の活躍期待さる
- ・寒気を衝いての遠乗会
- ・柔、剣道部の寒稽古開始 廿日より向ふ拾日間 午前七時より八時迄
- ・大阪学生軍より成る 選抜軍との一戦に 高専大会は依然続行 柔道部必勝を期す
- ・名古屋籠球界を見渡して 岸澄三
- ・名大看護婦の組織する 清交会懇親会開かる 十三日学生ホールにて
- ・友松師の謂ふ「浄土は無し」の新解釈 医学徒の見解は?
- ・館長を先頭に 図書館の充実を期す 学生よりの希望快諾 着々内容の更新成る
- ・学生のために 希望はまとめて 申出て呉れ給へ 福田館長談
- ・財団法人修養団第六十回 講習会に参加して 服部孝久
- ・一短歌といふもの― 山の子
- ・十指十目 廣田稔
- ・学生会に望むもの 和泉冽
- ・狐書のはなし(中) 杉田直樹
- ・道は只一つ A・T生

・編輯後記

- ・一九三五年を迎ふ
- ・学界展望 クーン教授とビタミンB
- ・拔萃 性ホルモン化学最近の進歩(一)
- ・科学時事
- ・学会

J. W. Cook

第二二号 一九三五年二月二十五日発行

- ・部説 今日を知る 卒業生諸兄に贈る
- ・卒業生諸君を送る 学長 田村春吉 学生課長 大庭士郎
- ・巣立ち行く人々に 山口正
- ・卒業生に望む事 二年組委員
- ・断片想
- ・卒業生に対する祝辞 桐原真一 吉川伸 岡田清三郎 阿久根睦 坂本陽
- ・四年を卒へんとするに際して 中西真吉
- ・学生服よ「では」 竹澤俊
- ・卒業の諸君に語る 葛谷貞二
- ・花薫る春に魁けて 本学改装工作着々進む
- ・新卒業生諸兄!!
- ・去るに鑑みて 板津清明
- ・学生名簿をアイウエオ順 来年度より愈々実施に決定
- ・栄ある卒業生送別会 名古屋ホテルにて盛大に挙行さる 三月八日午後一時より

- ・全学生の高唱する大学歌再募集!! 技の巧拙は問題にせず
- ・名大春への前駆 宿敵名高商を仆して 賀陽宮杯我手に帰す 東海学生馬術界の雄 我が部の雄々しき此の戦績
- ・寒風を劈いて 堂々六拾有余名の騎馬行進 壮なる馬術部の意気を見よ!!
- ・名大籠球部主唱の下に 名古屋大学高専籠球聯盟結成す 今春よりリーグ戦を開催
- ・本学四選手 銀盤上に活躍 全日本スキー選手権東海予選
- ・四月新学期までに本学武道場一部改築されん
- ・本学防護演習 前奏曲連日
- ・拾年度予算審議会に上つた 総収入三千円の行方 理事案先ず通過
- ・学内スキー大会挙行 二月三日木曾福島にて
- ・山本、佐々木両講師 相継いで助教授に就任さる
- ・聯盟費を繞つて 学芸運動息まく 聯盟内容に及ぶ
- ・サイレン
- ・安城組合病院へ 本学より医員派遣
- ・眼科助教授 林勝三博士御渡欧
- ・果然! 狂焰ゆらぐ地獄風景 昭和十年本学受験出願者数決定へ
- ・畏友安藤光蔵君 惜しまれて逝く
- ・結核なき学園の提唱 三年 森泰樹
- ・医業問題点評 発端は奈辺に? 解決は何処に? 医狂人
- ・痴人の譚言 森本生
- ・陸軍々医学校診療部を覗く 田中信吾
- ・Nationalsozialismus und Hochschulen und Studentenschaft (一) A. Halm

- ・ 猟書のはなし(下) 杉田生
- ・ 下ノ一色漁業組合共愛病院便り
- ・ 吾が命題 ヒステリー 松下鶴彌
- ・ 名大俳句会二月例会句抄
- ・ 青眼白眼 鶴舞住人
- ・ 編輯後記
- ・ 卒業生の諸氏に贈る
- ・ 綜説 脳下垂体後葉の組織学的構造 助教授 山田和麻呂
- ・ 抜萃 性ホルモン化学 最近の進歩(二) J. W. Cook Nat[ur]re, 134(1934) 758-760
- ・ 学会
- ・ 論文通過
- ・ 科学時事 ロシアに於ける医師養成及び医都建設
- ・ 重い水と生物 大脳のない犬に条件反射
- ・ マルタ熱に血清療法
- ・ ハーヴァード大学新総長
- ・ ヴイタミンB1の構造式発見さる? アメリカ学会よりの快ニュース
- ・ 家兔の血液型
- ・ オーキシンの動物体に対する作用
- ・ 市販結晶インズリン
- ・ OTTO WARBURG の脳場組織代謝に関する研究

第二三号 一九三五年四月二十五日発行

- ・名大への登竜門をくぐる 新らしき人々よ 先づ学生部会を知れ
- ・入学生諸君に与ふ 学生課長 大庭士郎
- ・庶務会計部より 特に新入生諸君へ
- ・庶務部及運動学芸の 各種所属団体の調査進む 今月末報告提出の筈
- ・仰見る万葉の花と共に 新入生歓迎会 本月二十三日盛大に開かれん
- ・学生訓育のため 武道場神棚祭挙行 廿一日午前十時より 各部員先輩多数参列
- ・断片想
- ・吾が前身愛知医大教授 精神病学界の泰斗 北林貞道先生の偉業を憶ぶ 蒞職廿五年記念並退職記念に会し
- ・北林教授の思ひ出 温厚篤実な人格者 戸茹教授談
- ・老仙遂ひに去る 河本教授の印象
- ・齒科北村講師謝恩会開かる 廿一日中央亭にて
- ・下之一色漁業組合共愛病院 第廿二回集談会 三月二十五日(月曜日)
- ・吾等が両外科 活動は続く
- ・本学新配属将校として 杉本理太郎大佐を迎賀す
- ・地盤強化の第二陣は?
- ・学生会概観 特殊なる自治団体の存在義
- ・新入生諸君に贈る 伊藤時雄
- ・鶴天学友会報と「名大」会報合併の声あがる!! 目下着々交渉中
- ・昨日は東、今日は西 巡回講演会の運命や如何?
- ・前愛知医大教授 北林貞道博士の記念祝賀会 四月廿日日本学講堂に開く 出席者多数盛会を極む

- ・新進気鋭の徒を迎へて 大学歌募集問題再燃す
- ・扱も皮肉な組合せ 社会見学の候補者は？
- ・新学期の教授中心座談会は 誰と誰？
- ・躍進学芸部の新事業 果して誰が選ばれるか？ 名士招聘講演会早くも輿論の焦点となる
- ・陸軍依托生の卒業生三君を送る
- ・昭和拾年卒業生の動静
- ・運動部説 新学期を迎え 抱負に燃える
- ・春は馬の背から 本学馬術部を中心に 飛躍する馬術聯盟
- ・華やかな春の名古屋籠球界 期待される名医大籠球部の活躍
- ・本年度本学入学者氏名
- ・Nationalsozialismus in Universitaet und Studentenschaft ア・ハーン 天野譯
- ・花時の裏表
- ・モット博士と語る 東山荘協議会に出席して 飯沼巖
- ・美と医学者―医学的芸術観について― 神路三郎
- ・吾が命題ヒステリー (B) 誇大妄想狂 松下鶴彌
- ・五月一日午後一時より 吉例助手団大会 市公会堂ホールにて
- ・論評 研究論文記載に対する希望
- ・科学時事 性ホルモンを繞る新しい疑問
- ・次回学会に於ける本学の活躍
- ・学会
- ・論文通過

- ・躍進の共済部
- ・共済部調査 下宿案内
- ・昭和十年度学生部会 一年役員決定
- ・編輯後記